

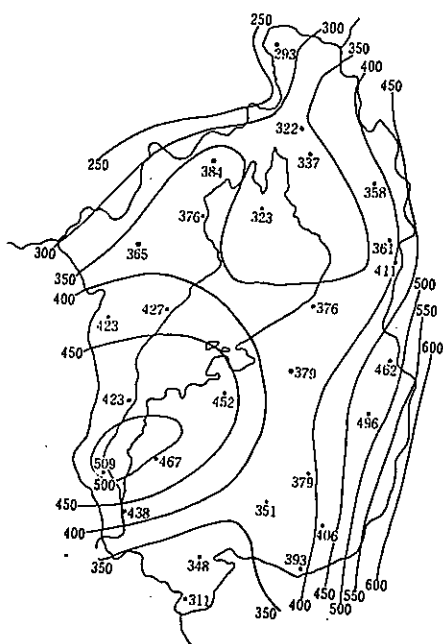
大雨注意報解除 30日 23時20分

昭和36年(1961)

6月26~29日 昭和36年梅雨前線豪雨 梅雨前線・台風(6106)

6月23日、本邦の南岸沖に弱い梅雨前線が発生し、南方海上から北上した2個の熱帯低気圧の影響も加わって次第に前線の活動が強まった。その後、前線は本州を東西に走って毎日活発な状態をつづけていたが、7月1日朝一応弱まった。この間6月24日には小さい弱い熱帯低気圧が四国沖を北上して25日四国に達し、また続いて25日夜四国南方海上に発生した弱い熱帯低気圧は北上して26日夜台風6号となった。この台風は27日夜室戸岬付近で消滅した。この2個の熱帯低気圧の影響で、各地に大雨があったが、殊に台風6号の場合は、台風域の東側を北上した南方の暖湿空気の影響が特に著しく、26日夜から28日にかけては梅雨前線の活動は一段と強まった。この期間に四国・近畿・東海・甲信・関東および北陸の各地方に大雨が降り、洪水・浸水・山くずれなどによる大きな被害があった。

降水量分布図
昭和36年6月24~29日



琵琶湖水位変化(鳥居川)



昭和36年

本県では、23日夜半から俄雨が降り出し、24日夕刻から地雨となって時どき強くなり、25日昼前まで続いて全般に約50mmの雨量となった。一度止んだ雨は25日夕刻前から再び降り出し、26日朝方からは時間雨量10mm、或いはそれ以上の強い雨となって26日夕刻まで降り続いた。この雨で各河川は増水し、雨量の多かった南部地方では家屋の浸水や崖崩れが起った。26日夜に入って小雨程度となったが、梅雨前線は相変わらず近畿地方中部に停滞し、この前線上を小低気圧が東進し、また台風6号が次第に近づいてきたので、27日未明から再び強雨となり時間雨量は15mmを越え、昼すぎまでつづいた。この強雨は県下全域にかなりの量に達し、100mmを越すところが大半で、各河川は一層増水し、堤防は氾濫・決壊した。27日夜から雨は殆んど小止みとなり、28日午前中は薄日もさした。しかし、28日夕刻になって再び降り出し、29日早朝から雨勢は強くなり、終日断続して夜半までつづき、全般に100mm内外の雨量となった。特に、この雨は短時間の強雨であったのが特徴で、朽木村百里岳では時間雨量50mm、堅田町梅木では11~12時に61mmの強雨が降っている。

この6日間続いた雨は県下全般に300~500mmの大雨となり、琵琶湖の水位は上昇する一方で、

7月1日遂にプラス108cmと昭和13年以来の高水位となり、周辺の水田は長時間冠水するものが現われて、稲作に大きな打撃となった。

なお今回の大雨で、24日から29日に至る総雨量は彦根では376mmに達し、梅雨時の一雨降雨量としては气象台創設以来の記録となった。また6月の月合計雨量は482mmとなり、明治38年(1905)の433mmを突破して第1位となった。

警戒状況

大雨注意報発表	25日 05時50分
同 上解除	25 10 20
大雨注意報発表	26 07 20
同 上(更新)	26 16 50
大雨警報・洪水注意報発表	27日 06時50分
大雨警報・洪水警報発表	27 10 10
大雨注意報・洪水注意報発表	27 18 40
同 上解除	28 06 00
大雨注意報発表	29日 07時40分
同 上解除	30 05 10

湖面上昇に伴う浸水面積 (ha)

市町村名	調査日時			市町村名	調査日時		
	6月30日 12時	7月6日 12時	7月11日 12時		6月30日 12時	7月6日 12時	7月11日 12時
	+104cm	+98cm	+77cm		+104cm	+98cm	+77cm
大津市	14.8	12.0	9.0	びわ村	300.0	210.0	190.0
瀬田町	48.1	42.4	27.9	湖北町	98.0	64.0	38.9
草津市	243.0	152.0	142.0	高月町	—	—	—
守山町	463.0	341.0	182.0	木之本町	—	—	—
中主町	188.8	188.8	103.8	西浅井村	16.0	14.1	7.5
近江八幡市	790.0	230.0	209.0	マキノ町	29.5	18.0	7.3
安土町	180.0	65.0	30.0	今津町	225.0	110.0	49.2
能登川町	379.3	321.1	186.5	新旭町	346.0	292.7	238.5
稲枝町	407.0	349.0	255.0	安曇川町	182.0	150.8	102.5
彦根市	367.0	242.0	131.0	高島町	122.5	94.9	61.8
米原町	116.2	5.0	—	志賀町	7.2	7.2	6.5
近江町	84.6	43.6	24.1	堅田町	38.1	28.1	16.1
長浜市	42.7	17.9	10.9	計	4,688.8	2,999.6	2,029.5

注・水位は、調査時点における鳥居川水位「湖沼利用状況調査書・県企画課編」による。

被害状況 (災害対策本部調)

区分	数量	被害額(千円)	区分	数量	被害額(千円)
人的被害			林地崩壊	142カ所	110,000
死者	2人		林道	48 "	9,120
建物被害		2,000	橋梁	7 "	1,880
住家全壊	2戸		一般林業施設	2 "	2,000
" 半壊	3 "		水産関係被害		26,077
" 床上浸水	223 "		水産被害	29カ所	383
" 床下浸水	2,445 "		漁具	9統	1,434
土木関係被害		902,913	その他		24,260
河川	559カ所	666,038	農作物関係被害		1,056,772
砂防	14 "	14,069	水稲		
道路	501 "	216,286	流失	10町	2,687
橋梁	9 "	6,520	埋没	45 "	11,847
耕地関係被害		126,520	冠水	11,025 "	940,374
農地			主要特産物		
田流埋没	55町	26,619	そ 菜		33,550
畦畔 "		3,690	桑 園		5,440
農業用施設			果 樹		9,750
農道	144カ所	9,171	そ の 他		53,124
水路	151 "	33,455	開拓関係被害		3,954
堤塘	44 "	1,555	農作物		3,954
溜池	29 "	15,060	畜産関係被害		3,310
橋梁	30 "	4,920	施設	1,570件	1,570
頭首工	45 "	15,150	飼料作物	35町	1,740
揚水機	39 "	4,540	学校関係被害		1,680
その他	3 "	12,360	その他の被害		1,000
山林関係被害		123,000	合 計		2,247,226

7月12日 前線

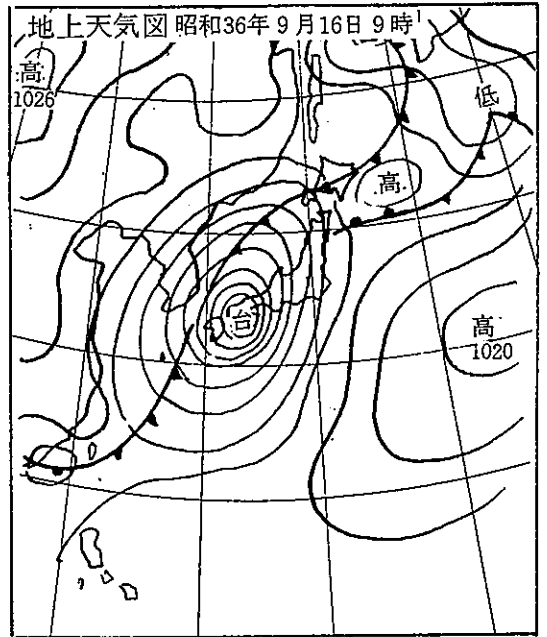
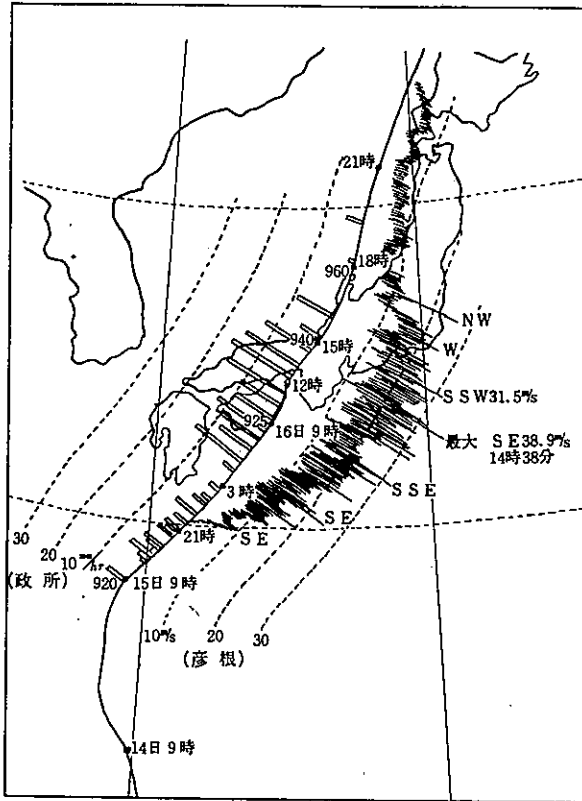
雷雨のため、近江八幡市小幡町・池田町の民家約200戸が浸水した。

9月16日 第二室戸台風(6118)

9月6日、マーシャル諸島東部に熱帯低気圧として発生、西に進んで8日9時980mbとなり台風18号となる。その後西北西進をつづけて次第に発達し、12日9時には沖ノ島島南東約500kmの洋上に達し、中心気圧888mb、中心付近の最大風速は100m/sを観測した。台風は13日は北西に、14日は北に転じて15日9時奄美大島を通過、これより進路を北東に変え、16日9時過ぎ、室戸岬の西方に上陸した。室戸岬での最低気圧は9時38分930.9mbを示した。その後は毎時45kmの速さで北東に進み、正午には淡路島南西部を通り、13時すぎ神戸・大阪間に上陸した。このころ観測した最大風速は大阪南南東33m/s(13時40分)・和歌山南南東35m/s(12時50分)・洲本南南東37m/s(12時10分)である。台風は更に北東進し、京都付近を通過して14時から15時にかけて琵琶湖の西方を北東に進み、速度は次第に増大して毎時60~70kmとなり、北陸・能登半島をとって日本海に抜け、さらに北東進して16日夜北海道小樽沖を通過し、オホーツク海に入った。

第二室戸台風経路図

彦根の気象変化図



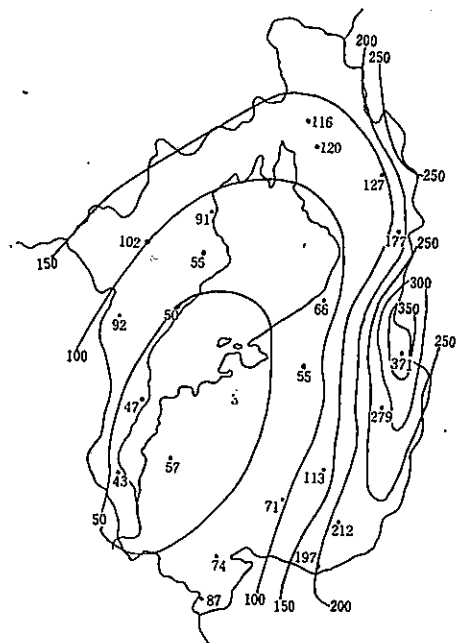
本県での状況

本県では、台風が九州南方海上を北東に進む15日夕刻から台風襲来の前兆が現われ始め、15日夜半から南東の風が時どき10%を越え、よわい俄雨が降り出した。16日9時過ぎ、台風が室戸岬に上陸する頃には風雨は一段と強まり、平均風速は15%を越え、風の

息は荒く、瞬間風速は25~30%を越えるようになった。また雨は平野ではやや強い俄雨が降り、東部山岳地帯では1時間20~30mmの強雨が連続した。台風が阪神間に上陸する13時過ぎには県下全般に風速は20%、瞬間は35%を越すようになり、さらに強まって14時から15時にかけて、京都西方から琵琶湖西方をとって敦賀湾に抜ける頃には県下全域に暴風雨は猛烈を極め、平均最大は30%内外に及び、瞬間は50%内外に達する暴風雨となった。このため、死者3人、家屋の全壊600戸、その他、別表被害表のとおり大災害を起し、交通は摩ひし通信は杜絶し、県下は殆んど停電した。特に台風の進路に近かった湖南・湖西では被害が大きく、風による被害は昭和34年9月の伊勢湾台風の被害を大きく上

降水量分布図

昭和36年9月14~16日



廻った。また、この台風による雨は鈴鹿山系で総雨量 300 mm をこえ、周囲の山間部では 100 mm をこえた所も多かったが、大きな台風が至近距離をとった割には概して雨は少なく、また長らく続いた干天後の雨でもあったため、雨による被害は比較的になかった。

彦根 最低気圧 954.8 mb 16日 14時36分

総降水量 66 mm 14～16日

政所 " 279 mm 14～16日

各地の風速 (16日)

要素 \ 地名	彦 根	春 照	木 之 本	虎 姫	能 登 川
最 大	S S W 25.7 15時00分	S E 29.0 14時40分	S E 32.5 14時45分	S 32 15時10分	30 14時20分
最 大 瞬 間	S E 38.9 14時38分	S E 42.0 14時32分		S 47.0 15時10分	54.8 14時30分

応急対策

- 台風の接近に伴い、15日各県出先機関及び各市町村に対し、防災対策に万全を期すよう指示するとともに、救助物資および資材の点検補強を行ない、関係職員を待機せしめる等防災体制に万全を期した。
- 16日9時に防災関係者会議を開催し、9時30分県災害対策本部を知事室に設置して厳戒体制をとるとともに、各関係機関との連絡を密にし、水防ならびに災害救助の万全を図り、自衛隊に対し連絡班の派遣を要請し、同部隊の出動準備完了をみ、また、日赤救護班を編成待機せしめた。
- 事態の悪化とともに被害続出のおそれが生じたので、同日14時30分県災害救助隊を設置し、堅田町外9市町村に災害救助法を適用し、救助活動を実施した。
- 大津市内水道断水に対処し、給水のため自衛隊大津部隊の出動を要請し、給水活動を行なった。

◎災害救助法適用市町村名

近江八幡市	堅田町	稲枝町
甲良町	西浅井村	マキノ町
今津町	安曇川町	高島町
新旭町		

被害状況表 (災害対策本部調)

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
人的被害			物的被害		
死者	3人		住家		953,540
重傷者	53 "		全壊	610戸	597,800
軽傷者	385 "		半壊	3,388 "	355,740

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
床上浸水	250戸		溜池	1カ所	100
非住家		131,208	干拓堤塘	1 "	3,000
全壊	4,036 "	88,792	蚕桑	7トン(マユ)	4,113
半壊	5,302 "	42,416	畜産関係		382,801
公共施設		58,713	和牛 ^{い死・流失} _{・疾病・傷害}	6頭	289
県有施設		31,470	豚 "	25頭	209
商工業関係	大企業 29 中小企業 4,973	525,317	鶏 "	9,770羽	7,153
土木関係		293,175	畜舎 全壊	123戸	76,800
河川	117カ所	212,925	半壊	522 "	
道路	69 "	47,180	豚舎 全壊	167戸	24,550
橋梁	5 "	4,070	半壊	157 "	
砂防	6 "	4,500	鶏舎 全壊	566戸	117,100
港湾	5 "	14,500	半壊	1,210 "	
漁港	5 "	10,000	飼料作物	1,309反	6,550
警察関係		9,097	飼養鶏の間接的被害		150,150
農林関係		4,409,661	水産関係		103,763
水稲	本年収量 予想トン	3,121,330	漁船流失	40隻	458
	減収率%		" 沈没	1 "	1,000
早期	13.940		" 破損	71 "	951
早植	55,200	1,066,740	水産施設	200 "	17,004
普通	182,400	2,054,590	漁具	195 "	54,282
計	251,540	3,121,339	養殖物	22	30,068
そ菜		197,833	公用農業共同 利用施設関係		106,440
なたね	1,089トン	54,451	農業倉庫	181件	36,480
果樹		161,104	共同利用施設	48 "	10,900
林務関係		228,145	有線電話	9 "	13,600
治山関係	19.0 ha	30,000	資材		28,640
林道関係	13路線	7,330	その他	92 "	16,820
風倒木 "			教育関係		154,055
折損木 "	42,940m ³	185,500	小学校	211校	50,211
炭かま破損	311基	4,710	中学校	80 "	42,307
その他		605	高等学校	26 "	19,497
農地及び農業用施設		49,672	特殊学校	2 "	580
農地埋没	27カ所 (53.7アール)	1,930	幼稚園	31 "	1,578
畦欠損	1カ所	25	短大	3 "	3,098
頭首工	19 "	8,730	小計	353 "	116,761
橋梁	36 "	3,601	社会教育保健 施設		2,858
農道	31 "	1,277	文化財		33,926
水路	45 "	12,365	総被害額		6,566,236
揚水機	503 "	18,644			

地 方 別 被 害 状 況

県事務所 区 分	草 津	水 口	八 日 市	彦 根	長 浜	今 津	滋 賀 郡	大 津 市	計
死 者 人	1				1	1			3
負 傷 者 人	128	4	51	30	165	46	9	5	438
住 家 全 壊 戸	148	16	106	60	94	69	40	77	610
" 半 壊 戸	862	88	607	485	546	536	126	138	3,388
" 床 上 浸 水 戸						250			250
" 床 下 浸 水 戸	28	72		15	185	257			557
非 住 家 全 壊 戸	1,034	156	719	683	833	446	102	63	4,036
" 半 半 壊 戸	1,317	140	902	859	1,214	708	134	28	5,302

10月26～28日 低気圧

26日3時に東支那海に発生した1004mbの低気圧が急速に発達しながら北東に進み、15時から27日9時にかけて九州南部から四国・大阪湾に進み、996mbに発達した。その後は衰弱しながらゆっくり東北東に進み、29日には日本東方洋上を北上した台風26号に併合されたが、この低気圧が九州南部から近畿地方中部に進む間、進路近く各地では風雨が強く、とくに九州・四国・近畿の太平洋側では多い所で500mm以上の大雨を降らせた。

このように低気圧が異常に発達し、10月下旬に大雨を降らせたことは珍しいことである。

本県では、26日夜半から南東の風が強まり、27日早朝にかけて最も強く、県下全般に最大風速15%内外に達した。その間雨は大したことはなかったが、風がやや弱まった27日明方より安曇川上・中流域と鈴鹿山系では強い雨になり、夜に入って次第に強まり、28日までつづき、遂に総雨量は300～500mmに達した。このため、各河川は増水し、堤防の決壊その他被害が出た。

彦根 総降水量 102mm 26～28日

油日 " 531mm 26～28日

被害状況

住家全壊流失	1戸	道路損壊	4ヵ所
" 床上浸水	1 "	橋梁流失	9 "
" 床下浸水	193 "	堤防決壊	11 "
田畑流埋没	2 ha	山崩れ	3 "
田畑浸冠水	506 "		

昭 和 37 年 (1962)

6月2～4日 低気圧

2日から4日にかけて、低気圧が日本海を東進したので大雨が降り、次の被害があった。

床下浸水 100戸 (草津市70戸・虎姫町30戸)

田畑冠水 12ヵ所 760 ha

河川関係 笹路川・蛇砂川・佐治川護岸一部決壊

6月9～10日・13～14日 梅雨前線・低気圧

9日梅雨前線上を低気圧が東支那海南部から北東に進み、夜、西日本に上陸して近畿地方北部

を中心にながりの大雨を降らせた。本県北西部では90mm以上に達したが被害はなかった。

梅雨前線は11日・12日は幾分南下していたが、13日再び北上し、この前線上を小低気圧が西日本を東進したので、13日午後から夜にかけて近畿中部を中心に大雨が降った。本県でも北部及び西部で100mm以上に達し、木之本・湖北・虎姫町で若干の被害を出した。

被害状況

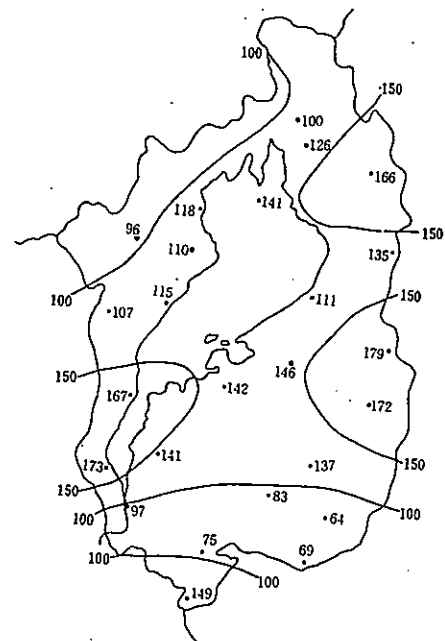
9～10日	被害なし		
13～14日	住家半壊	1戸	(木之本町)
	床上浸水	2 "	} (虎姫町)
	崖崩れ	2カ所	
	田冠水	15 ha	} (田川流域)
	畑冠水	3 "	

7月4～5日 梅雨前線・低気圧

梅雨前線が北上して西日本に接近し、1日夜から2日朝にかけて紀伊半島中部・四国南岸に大雨を降らせた。3日は前線が更に北上して西日本を縦断し、活動が活発となって6日朝まで西日本上に停滞した。このため、3日夜九州中部から北部にかけて豪雨となり、熊本県を中心に死者17人、行方不明8人、その他かなりの被害を出した。

本県では、4日早朝から雨が強く、6日朝まで断続的に強くなって降り続き、北東部から東部の山岳地帯では150mm～200mmに達する大雨となった。このため湖北から湖東・湖南にわたって所どころ小河川が氾濫し、家屋の浸水・田畑の冠水など被害があった。

降水量分布図
昭和37年7月3～5日

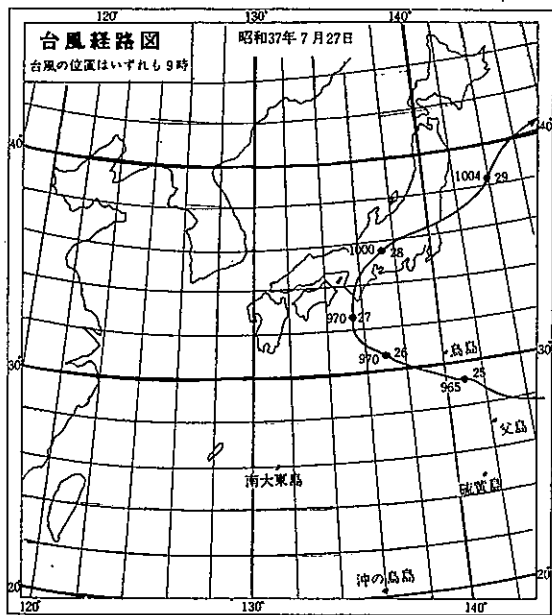


被害状況

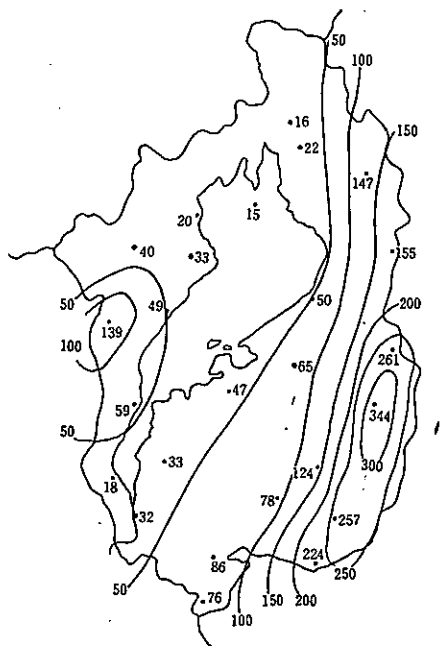
死者	1人
床下浸水	290戸
水田冠水	349 ha
山・崖崩れ	1カ所
鉄軌道被害	1 "
(被害は主として長浜・草津署管内)	

7月27～28日 台風(6207)

台風7号は21日未明、マークス島南東約500kmの海上に発生し、次第に発達しながら西進し、23日マークス島から硫黄島に向う海上では一時960mbまで発達した。26日夜進路を北から北北東に向け、27日13時頃紀伊半島白浜の南東方岸に上陸し、奈良県を縦断して27日夜半から28日早朝にかけて滋賀県東部を北北東に進み、岐阜県北部から長野県に進み、温帯低気圧となって29日朝



降水量分布図
昭和37年7月27, 28日



三陸東方海上に抜けた。

本県では、台風が紀伊半島に近づいた27日昼前から次第に東～南東の風雨が強くなり、台風が奈良県に入った夕刻にはさらに強まり、最大風速は10～15^{m/s}、時間雨量は40～50^{mm}、政所では18時から22時までの4時間に171^{mm}の強雨が降り、総雨量は341^{mm}に達した。このため、湖東の愛知川・日野川上流では急激に増水し、山沿地方で崖崩れ、小河川の氾濫などの被害があった。

彦根 最低気圧 994.7 mb 27日23時40分

最大風速 E S E 15.0^{m/s}

27日17時49分

最大瞬間風速 E S E 25.8^{m/s}

27日20時50分

総降水量 50^{mm} 27, 28日

政所 " 344^{mm} 27, 28日

被害状況(被害は主として甲賀・神崎・蒲生郡)

床上浸水	3戸
床下浸水	43 "
非住家被害	2棟
水田冠水	28 ha
道路損壊	2カ所
堤防決壊	2 "
崖崩れ	8 "
鉄軌道被害	1 "
通信線被害	267 "
ろかい舟流失	7隻

警戒状況

風雨注意報発表	26日06時30分
暴風雨警報 "	26 14 00
風雨注意報 "	27 22 30
同 上解除	28 05 30

8月19日 台風(6212)

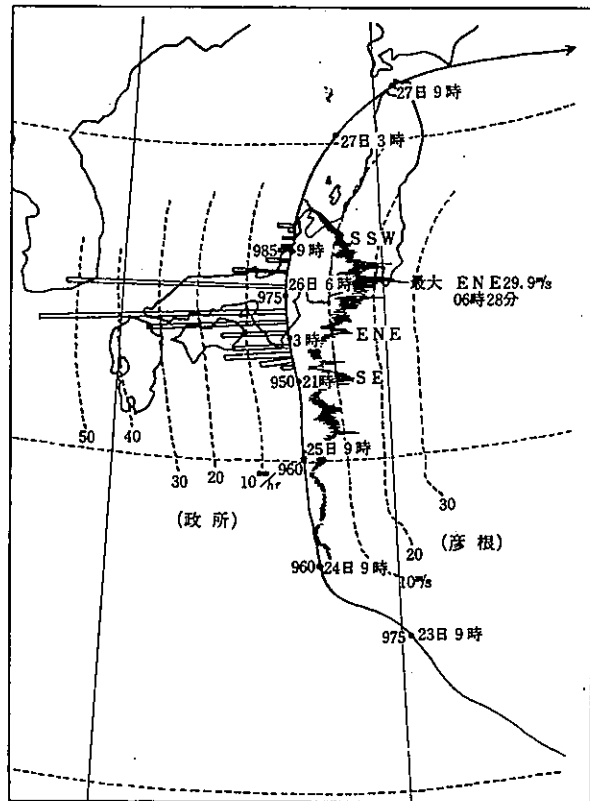
台風12号は17日に硫黄島の北東洋上に現われ、18日には鳥島東方洋上に進み、関東地方を襲うかと思われたが、20日から21日にかけて房総沖を北北東に進み、三陸沖に去った。

本県では、この余波をうけて18日から湖上は北西の風波がやや高く、このため湖西で水死1名、行方不明6名など、湖上事故が多く出た。

8月25～26日 台風(6214)

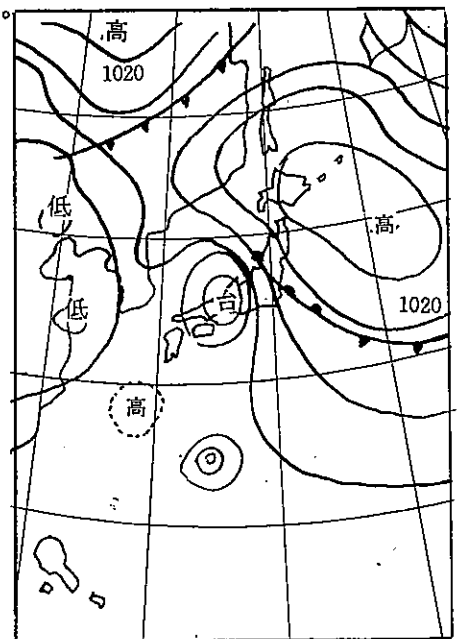
8月20日カロリン群島で熱帯低気圧として発生し、21日9時台風14号となる。その後発達しながら北西進し、硫黄島の西方海上を通過して24日6時には同島の西北西400kmの海上に達し、960mbとなる。これより進路を真北に変えてそのまま直進し、26日4時頃三重県南部の長島町付近に上陸した。台風は6時に三重県から滋賀県南部に入り、8時にかけて滋賀県中部を北に縦断して福井県に入り、日本海に抜けて温帯低気圧となり、27日9時には津軽海峡を通過して28日北海道東方海上に去った。

台風経路図
彦根の気象変化図



本県では、25日夜半過ぎから次第に東北東の風雨が強くなり、夜明け頃から一段と強まり、6時から7時にかけてが最も強く、全般に平均最大15～20%、最大瞬間30%内外に達した。また、雨も強く、特に鈴鹿山脈の君ヶ畑では6時前後に時間雨量90mmの強い雨となり、総雨量は300mmを超えた。このため湖東の各河川は増水して警戒水位に達し、一部では決壊して家屋の浸水などかなりの被害が出た。特に国鉄東海道線では、犬上川鉄橋が増水のため橋台をえぐられ、下り線路が曲って不通となり、27日夕刻まで片道運転を行った。

地上天気図
昭和37年8月26日9時



彦根	最低気圧	986.6mb	26日07時25分
	最大風速	E N E 15.7m/s	26日06時20分
	最大瞬間風速	E N E 29.9m/s	26日06時28分
	総降水量	130mm	25, 26日
政所	"	236mm	25, 26日

警戒状況

強風注意報発表	25日19時50分	暴風雨警報発表	26日05時20分
風雨注意報 "	26 01 00	風雨注意報 "	26 08 50

洪水注意報発表 26日 08時50分

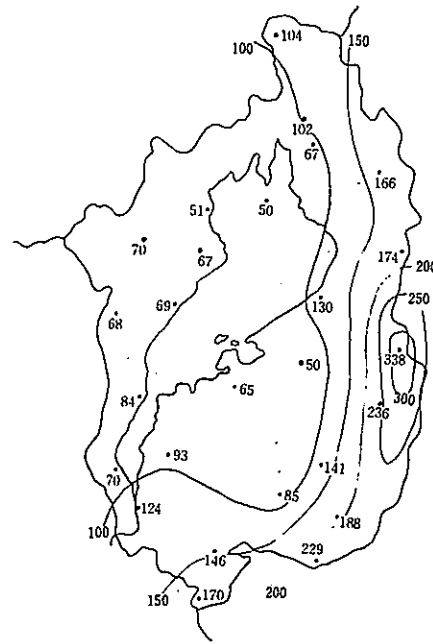
風雨・洪水注意報解除

26日 12時20分

被害状況

死者 1人
 負傷者 1人
 住家全壊流失 1戸
 住家半壊 4人
 住家床上浸水 5人
 " 床下浸水 694人
 " 一部破損 58人
 非住家被害 35棟
 田畑流埋没 4ha
 田畑浸冠水 65人
 道路損壊 10カ所
 橋梁流失 1人
 堤防決壊 6人
 山崩れ 9人

降水量分布図
 昭和37年 8月25, 26日



昭和38年 (1963)

5月と6月前半の長雨 梅雨前線・台風 $\begin{pmatrix} 6 & 3 & 0 & 2 \\ 6 & 3 & 0 & 3 \\ 6 & 3 & 0 & 4 \end{pmatrix}$

この年は北太平洋高気圧が例年より早く発達し、大陸から移動してきた高気圧もやや北偏して通り、日本東方洋上に出て停滞・発達するものが多かった。このため、大陸から東進、或は南下してきた低気圧や前線も、日本付近に停滞して、曇雨天の日が多くなった。5月末頃からオホーツク海高気圧が発達して本格的な梅雨型になり、6月4日台風2号の間接的影響で北陸・山陰に大雨があり、13日から14日にかけて台風3号が四国に上陸して北東進したので各地で大雨が降り、かなりの被害があった。このように、台風が梅雨期間中に2つも接近したのは珍しいことである。その後6月18日から19日にかけて台風4号が日本南方洋上から西に迂廻して東支那海を北上し、これと同時に梅雨前線も北上し、西日本は北太平洋高気圧の圏内に入って梅雨の中休みの状態になった。

この長雨で、西日本各地では麦・野菜類を始め各種農作物に非常に大きな被害を出した。

本県でも4月末から5月一杯、さらに6月半ばにかけて天気は悪く、彦根で快晴であったのは5月4日の一日で、晴の日は数日あったが、その他は曇や雨の日であった。そのため5月の降水量、降雨日数などはいづれも彦根地方气象台開設以来の記録となった。

5月の彦根における諸要素の平年との比較及び順位

要素	今年	平年	順位
月降水量	283mm	128mm	1
日降水量 ≥ 0.1の日数	21日	12.8日	1
日降水量 ≥ 1.0の日数	18日	9.8日	1

要素	今年	平年	順位
曇日数	22日	15.0日	1
日照日数	10日	3.1日	1
日照時間	98.7時間	208.2時間	1
日照率	22.8%	48%	1

注・平年値は1931～1960年の値 順位は1894以降の順位。

昭和38年長雨による農林畜水産関係被害総括表

区分	種別	作物名	作付面積	被害見込量	被害見込額	備考
農作物	水稲		62,400.0 ^{ha}	169	14,555	植換に要する経費を含む (1) 減収による被害 減収見込量 減収見込金額 12,919 t 538,912千円 (2) 品質低下による被害 被害見込量 被害見込金額 7,055 t 300,640千円 計 19,974 t 839,552千円
	大麦		2,700.0	5,424	195,861	
	ビール麦		6,100.0	9,906	449,831	
	裸麦		700.0	1,449	62,162	
	小麦		2,000.0	3,195	131,698	
	小計		11,500.0	19,974	839,552	
	野菜		2,479.0	11,596	506,890	
	花		11.5	600 ^{千本}	2,800	
	果樹		524.0	1,567	87,911	
工芸作物		茶	920.0	1,288	83,720	
		薬種	5,841.0	3,738	186,900	
		煙草	86.0	17	7,670	
		小計	9,861.5	18,206 ^{千本} 600	875,891	
養殖		6,299.0	20	16,000	夏播飼料の播種遅延による被害は含まない。	
畜産	飼料作物	950.0	11,400	28,500		
林業	山林崩壊		0.1	1,000		
	林道		1線 20 ^m	1,000		
	小計			2,000		
総計				1,776,498		

5月の各地の雨量と平年値及び平年比

地名	本年	平年	平年比	地名	本年	平年	平年比
彦根	283	131	2.2	愛知川	293	130	2.3
木之本	286	138	2.1	吉槻	276	151	1.8
竹生	289	128	2.3	市場	314	145	2.2
今津	313	136	2.3	北小松	321	154	2.1
大津	365	163	2.2	堅田	319	159	2.0
多羅尾	471	142	3.3	土山	325	168	1.9
水口	375	132	2.8	治田	310	145	2.1
八幡	300	138	2.2	日野	324	122	2.5
政所	400	165	2.4	瀬田川	322	155	2.1
中之郷	347	173	2.0				

7月11～12日 梅雨前線

11日未明から夜半にかけて湖南と鈴鹿山系一帯に大雨が降り鈴鹿山系で100mmを突破する所があった。また大津市内では11日13時すぎ雷を伴う土砂降りとなり、次の浸水被害があった。

床下浸水 265戸

大津市15戸・草津市140戸・近江八幡市40戸・石部町50戸・守山町20戸

この外彦根市で水びたし約500戸をはじめ各地で田畑が冠水。

7月22日 雷雨

湖西地方では15時頃からの激しい雷雨で、安曇川町では約80戸が床下浸水した。

8月24日 前線

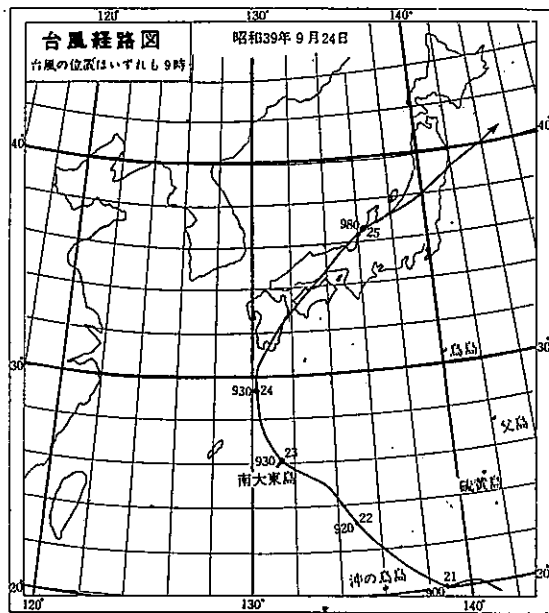
湖北地方で正午過ぎから雷を伴った集中豪雨に見舞われ、長浜市高田町では約80戸が床下浸水した。

昭和39年(1964)

7月9日 梅雨前線・低気圧

日本海中部の低気圧より東西に伸びる梅雨前線の活動が活発になったので、7日以来連日雨が降り、北部山間部では150mmを突破する大雨、栗太郡瀬田町では雷雨を交えた大雨になった。

このため、伊香・東浅井両郡を流れる姉川・高時川の上流ではかなり増水し、丹生小学校尾羽梨分校・小原分校は休校した。また大津市大石では民家4戸が床下浸水した。



9月25日 台風(6420)

9月17日9時、ガム島の南東200kmに1008mbの弱い熱帯低気圧として発生、19日15時998mbで台風へ発達し、20号となる。21日15時895mbと非常に強いものとなり中心の最大風速は60m/s中心から200km以内25m/s以上の暴風で、昭和34年の伊勢湾台風匹敵する大型台風であった。22日9時、920mbとなり、24日17時大隅半島先端佐多岬に上陸、当時は940mbとなる。この後は幾分勢力は衰えたが急速に加速しながら北東に進み、瀬戸内海から岡山県東部、京都府北部をとって若狭湾から北陸方面へ進んだ。

本県では、台風が九州南部に達する24日昼頃から時どき雨が降り、夜に入って次第に連続して降るようになり風は25日3時頃より次第に強

まり、県下全般に6時から9時過ぎにかけて最も強く、北部では一般に6時頃の南東風、南部では8～9時の南～南西風が特に強かった。9時過ぎから風雨ともに急速に弱まり、午後には晴れ間も現われてきた。

彦根 最低気圧 986.7mb 25日07時25分

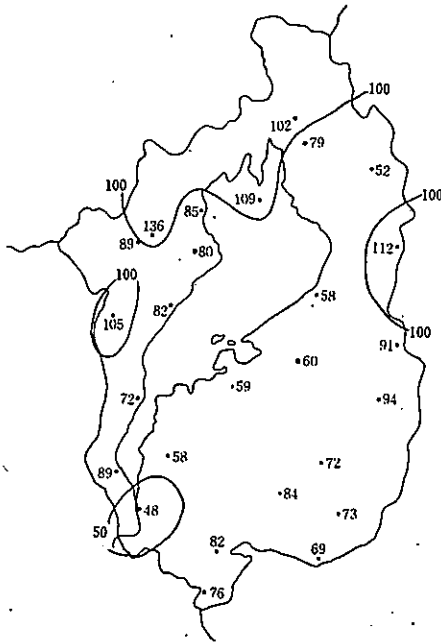
総降水量 58mm 23～25日

柏原 総降水量 112mm 23~25日

各地の風速 m/s

要素 \ 地名	彦根	堅田	安曇川	幸津川	虎姫	能登川	野洲	石山	木戸
最大	SSW 19.3 08時40分	14.9 08時10分	ESE 15.7 06時00分	S 12.8 08時10分					16.5 08時00分
最大瞬間	SSW 29.0 08時36分				33.0 08時47分	26.0 ⁴ 05時35分	29.0 07時30分	34.0 08時20分	

降水量分布図
昭和39年9月23~25日



台風の特徴

1. 中心気圧が900mb以下に発達した強烈な台風で、九州接近まで勢力はあまり衰えなかった。
2. 西日本を通過中も強い勢力を持ち、台風の形がくずれなかった。
3. 9月下旬の台風としては転向点の緯度が高く、その経度は西にかたよっていた。
4. 転向後の加速が大きく、日本を通過中の速度は異常に早かった。

警戒状況

風雨注意報発表 24日 21時30分
同 上解除 25 10 50

被害の概要

今回の台風は本県では比較的雨が少なかったため、甚大な被害をまぬがれることができたが、

風はかなり強かったため、県下全域にわたり水稻倒伏による減収が大きく、農作物も多大の被害をうけた。その概況は次のとおりである。

被害表 (消防防災課調)

区分	数量	被害額(千円)	区分	数量	被害額(千円)
人的家屋関係		21,700	一部損壊	149棟	
負傷者(軽傷)	2人		公共建物		
住家			半壊(一般)	2カ所	100
全壊	3戸	3,885	一部損壊(学校)	63 "	2,086
半壊	2 "		" (一般)		2,464
一部損壊	440 "		観光施設(水泳場施設)	2カ所	10
非住家			文化財(竹生島)	1 "	220
全壊	33棟	12,935	農畜産関係		1,711,826
半壊	15 "		農作物関係		
			水稻		1,586,620

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
野 菜		94,166	耕 地 関 係		11,358
果 樹		12,000	農 地 流 失	0.2 ha	50
工 芸 作 物		5,000	農 地 埋 没	0.3 "	600
桑		3,000	畦 畔 損 壊	36件	1,005
飼 料 作 物		220	頭 首 工	9カ所	6,550
そ の 他		9,600	農 道	40m	250
施 設 関 係			水 路	67 "	1,000
畜 産 関 係			溜 池	1カ所	500
共同利用施設	1カ所	100	揚 水 機 場	37 "	1,403
非共同利用施設	5 "	1,120	土 木 関 係		279,790
水 産 関 係		8,065	河 川	316カ所	228,686
船舶破損(無動力船)	1隻	40	道 路	186 "	30,036
水産施設(魚揚場)	11カ所	1,735	砂 防	34 "	9,959
漁 具 類	66件	5,654	橋 梁	2 "	1,815
水 産 物		636	港 湾	4 "	7,594
林 業 関 係		5,150	漁 港	2 "	1,700
林 道 損 壊	3カ所	150			
治 山 関 係	4 "	5,000			

公共機関関係の被害の概要

1. 電気通信施設 (滋賀電気通信部)

有線電話施設において市外93回線、市内(加入者回線) 1,738回線の障害により通信不能となったが9月29日17時までに全部復旧した。

2. 電力施設 (関西電力株式会社滋賀支店)

電力関係施設については送電4件、配電線で60回線、その他施設関係において61件の被害をうけたが9月25日夕方までに復旧した。

昭 和 40 年 (1 9 6 5)

5月26~27日 台風(6506)・前線

22日、フィリピン東方洋上で発生した熱帯低気圧は、同日9時台風6号となり、25日にはルソン島東方洋上に進み、次第に北東に転向し、26日昼頃沖繩の南東約300kmの洋上を毎時50kmで北東進した。この台風は豆台風であったが割合に速度が速く、27日朝3時にはすでに潮岬南方約300kmに達し、遠洲灘から房総沖をかすめて鹿島灘に去った。一方25日には、東支那海に低気圧が発生し、中心より東に伸びていた前線は、低気圧の東進と台風6号の北上に刺激されて前線活動が活発になり、西日本は26日早朝から雨が降り出し、各地に大雨を降らせ、その被害は九州から東北地方まで36都府県に及び、死者13人、行方不明9人を出すなど大きな災害があった。

本県では、26日朝方から小雨が降り出し、夕刻から強雨になり、27日昼前頃に止んだ。この雨は各地で100mmを突破し、とくに湖北の中之郷・高時川上流付近・湖西の百里岳では190mm内外の大雨になった。彦根では27日の日降水量は88.2mmで、5月の日降水量としては彦根地方気象台創設以来第一位の記録となった。

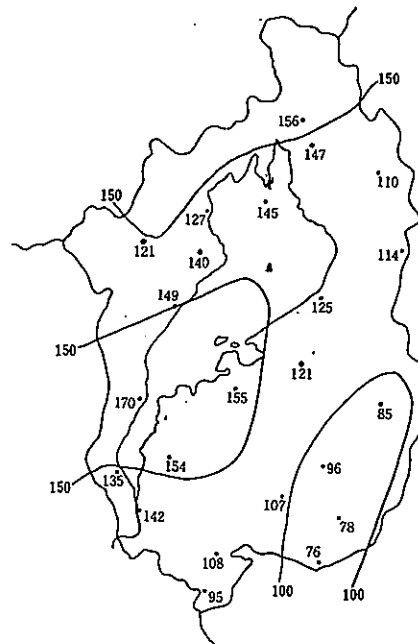
このため、各河川は出水、または増水し、所どころで河川や道路の損壊が発生し、浸水家屋や

冠水田が出るなど被害があった。

被害状況（消防防災課調）

床上浸水	6戸
床下浸水	329 "
非住家全壊	1棟
田冠水	7,761 ha
土木施設	
河川	171カ所
砂防	38 "
道路	195 "
橋梁	1 "
港湾	1 "

降水量分布図
昭和40年5月26日



6月19～20日 梅雨前線・台風（6509）

6月19日から20日にかけて、梅雨前線が西日本の南岸に接近して活発になり、台風9号くずれの低気圧が九州から若狭湾へ抜けた。このため九州熊本市で416 mm、広島市で311 mmという記録的な大雨を降らせ、崖くずれで13人の犠牲者を出した。

本県では、19日夜に雨強く、21日まで降ったり止んだり、湖西と湖北の一部に100 mmを突破する大雨が降り、水害が発生した。

被害状況（消防防災課調）

住家全壊	1棟3世帯	砂防	2カ所
土木施設		道路	11 "
河川	33カ所	橋梁	2 "

6月26日 梅雨前線・低気圧・台風（6510）

26日、低気圧が東支那海で発生し、27日にかけて九州をとおり西日本を縦断した。この頃、台風10号が南西諸島を北上して四国沖を北東に進んだ。

本県では、26日午後から雨が降り出し、27日まで降ったり止んだりであったが、28日再び前線活動が活発になり、激しい雷雨が発生し、彦根で80 mm、北小松で100 mmを越す大雨になった。この大雨で彦根市内では低地が浸水した所があった。

7月6～7日 梅雨前線

6日、梅雨前線は西日本に停滞し、夜に入って活動が活発になった。

本県では、雨は夜から本降りとなり、夜半すぎから次第に強くなり、7日早朝に最も強く、県の南部から南西部にかけて90 mm以上の大雨になった。このため南部の小河川の氾濫が多く、特に葉山川が破堤し、人家・耕地に被害を与えたほか、大津・草津・近江八幡方面で家屋の浸水・堤防決壊・崖くずれなどの被害があり、東海道新幹線では10数箇所の築堤決潰があり、一時不通に

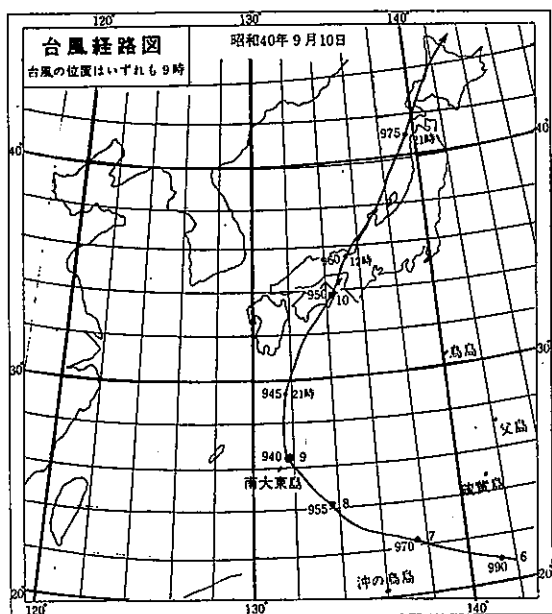
なった。

被害状況（消防防災課調）

住家半壊	4戸	砂防	2カ所
床上浸水	13 "	道路	47 "
床下浸水	219 "	橋梁	2 "
田冠水	506 ha		
土木施設			
河川	86カ所		

9月10日 台風（6523）

4日、硫黄島付近に発生した熱帯低気圧は次第に発達し、6日6時より台風23号となった。その後台風は毎時15kmで北西に進み、8日9時には南大東島東約300kmの洋上に進んだ。9日9時同島の北方約50kmの洋上に達した頃には中心気圧940mb、最大風速は55m/s、風速25m/s以上の暴風半径は200kmであった。この頃から台風は次第に北分を増し、9日18時頃から北～北北東に進み、次第に速度を増し同日24時には鹿児島島の南東約200kmの海上に達した。その後進路は北北東～北東に変わり10日6時には四国南東海上に接近し、8時30分頃四国安芸市に上陸した。上陸後幾分衰えて950mbになったが、毎時55km



に加速し四国東部を縦断し、10時には播磨灘に入った。台風はなおも北北東～北東に進み、11時前頃、姫路市付近に再上陸し、毎時60kmに加速して12時には豊岡市付近を通り、昼すぎには若狭湾へ抜けた。この頃台風は960mbに衰えたが、中心の最大風速は40m/s、半径150km以内には25m/s以上の暴風雨で依然として強い勢力を保ちながら日本海側沿いに北東進し、同夜半には北海道西岸に三度び上陸し、北部を斜断してオホーツク海へ抜けた。

本県の状況

台風23号が南大東島付近に達した頃から日本南岸を東西に伸びていた前線活動が活発になり、彦根では9日3時過ぎから雨が降り出し、夕刻まで降り続いた。この雨は夜に入って一時小降りになったが、台風が四国南岸に接近する7時過ぎから次第に南東の風雨が強まり、9時すぎには全域とも暴風雨となり、9時50分には彦根で最大瞬間風速東南東36.7m/sを記録し13時頃まで強い風雨が荒れ狂った。なお大津地方ではこの頃から南西の強風がつのり夕方までつづいた。

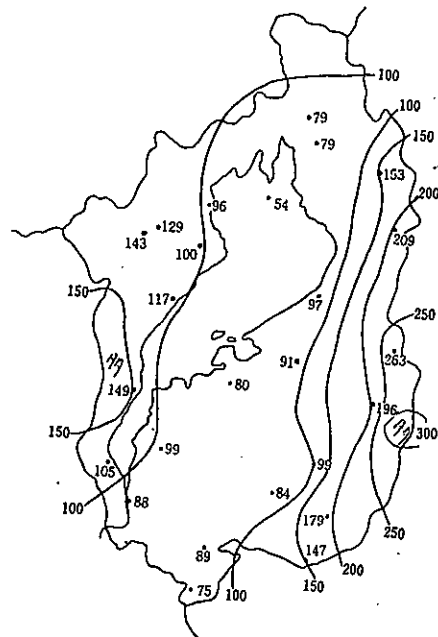
また、雨量は鈴鹿山系が特に多く200～300mm、比良山系で100～180mm、平野部で60～100mmであった。

台風の特徴

- 秋型台風でまず前線性降雨に始まり、広い範囲にわたって強い南よりの風雨になり、特に風害が大きかった。
- 日本に接近するに伴い加速し、中心気圧は余り衰えず、予想外に早く日本を通過し、殆んど日本全域に被害をもたらした。
- 室戸台風、第二室戸台風、ジェーン台風のコースに似ていて本県にとって最悪のコースをとった。
- 風の息が大きく、最大瞬間風速は東南東36.7m/sに達した。この値は当台創設以来第4位の記録である。

彦根 最低気圧 979.8mb 10日12時06分
 最大風速 E S E 20.0m/s
 10日10時40分
 最大瞬間風速 E S E 36.7m/s
 10日09時50分
 総降水量 97mm 8~10日
 柏原 " 206mm 8~10日

降水量分布図
 昭和40年9月8~10日



警戒状況

暴風雨警報発表 10日06時40分
 強風注意報 " 10 14 40
 同上解除 10 19 20

県では暴風雨警報発令と同時に、警戒待機中であつた消防防災課員・水防要員により、直ちに関係者の動員を行ない、8時に県災害対策本部を設置し、県の機構を挙げて、事態に対処することとなった。

被害状況

災害対策本部でとりまとめた被害状況は次表のとおりであり、人的被害・住家の全壊・流失被害等は比較的少なかったが、風雨はかなり強く、県下全域にわたって家屋の一部が損傷し、とくに湖東・湖北地方を中心にして県内一円に、水稻倒伏による減収被害が甚大であつた。

被害表 (災害対策本部調)

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
死 者	1人	80,413	床下浸水	4棟	9,025
負 傷 者	17 "		非住家損壊	1,556 "	
建物被害			公共建物損壊	85 "	
全 壊	5棟		学校施設	64校	7,790
半 壊	36 "		観光施設	13カ所	1,060
一部損壊	3,125 "		文化財等損壊	4件	2,466

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
水 陸 稲	23,756 ha	1,721,004	農業共同利用施設	1 件	600
その他の農作物	2,471 "	67,425	土 木 施 設		246,701
畜産施設	19件	2,525	河 川	112カ所	
水産施設	59カ所	12,338	道 路	17 "	
林産物・施設	崩壊 0.01 ha 林産物 2,071	20,769	橋 梁	2 "	
農地・農業用施設			砂 防	10 "	
農地流埋没	63カ所	1,170	合 計		2,182,646
施 設	57 "	9,360			

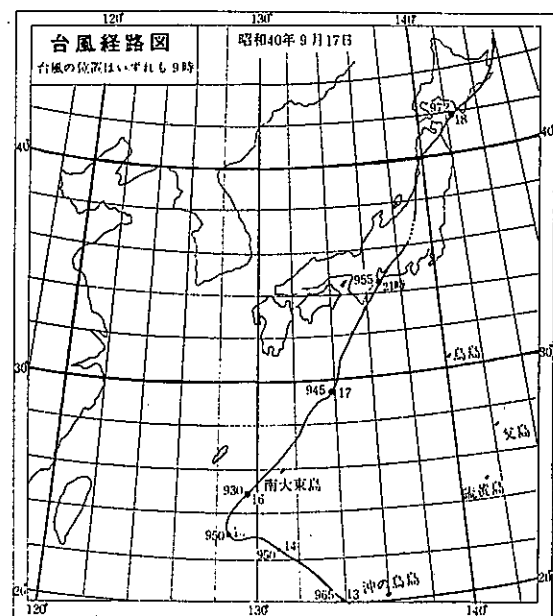
9月17～18日 秋雨前線・台風(6524)

気象経路

- 昭和40年9月11日09時、沖ノ鳥島南東洋上のよわい熱帯低気圧は台風24号となる。中心気圧995mb、北西毎時16km、次第に発達。
- 13日9時、沖ノ鳥島西方約200kmの洋上、15日9時石垣島南東約300kmにあり中心気圧950mb、中心付近の最大風速55m/s、25m/s以上の暴風半径200km、同日12時には940mbに発達し、殆んど停滞。
- 12日日本南方洋上に前線が発生、台風24号が沖ノ鳥島付近を北西に進む頃から次第に北上し14日本邦南岸に接近した。同日12時頃から四国東部より滋賀県付近を経て北陸地方にのびる気圧の谷が発達し、前線性豪雨が降り易い状態になった。
- 16日9時、台風は沖縄南東約250kmにあり中心気圧930mbに発達、中心付近の最大風速60m/s、北北東～北東毎時15km、同日21時中心気圧940mb、同日24時北東毎時30kmに加速。
- 17日09時、四国室戸岬南方約400kmにあり、中心気圧945mb、中心付近の最大風速55m/s、25m/s以上の暴風半径南東側250km、15m/s以上、700km、15時潮岬南南東約150kmにあり、北東毎時45km、16時北北東毎時45km、18時過ぎ潮岬東方をかすめて熊野灘に進み、21時志摩半島に上陸、中心気圧955mb、北北東毎時50km。
- 17日22時頃、渥美半島に再上陸し、中部地方を斜断し、関東・東北地方を経て18日朝北海道東方洋上に去る。

本県の状況

本県では、13日夜から前線による雨が降り出し、14日は終日雨で夜に入って雨はかなり強く降り鈴鹿山系では日量200mmを突破する所があった。しかし15日午後から16日にかけては時どき小雨になった。



17日朝、台風が四国南方洋上に達する頃から再び雨が降り出し、14時頃から次第に北西の風雨がつつのり、18時過ぎから全般に暴風雨になり、夜半すぎまで暴風雨が荒れ狂った。しかし18日1時頃から次第に風雨はおさまったが鈴鹿山系・比良山系に連日降りつづいた豪雨は500～700mm、平野部で200～400mmの多量に達した。

異常気象の特性

- 台風前面の前線による降雨が早く始まり、13日から16日まで4日間におたつてつづき、各地で大雨が降った。
- 台風24号は本年の最も大きい台風で、前線による長雨がつづいたあと、台風が本県の東方を通過したため、とくに水害が大きかった。
- 台風は四国南方洋上に達する頃から昭和28年(1953)9月25日の13号台風に似たコースをとった。
- 一般に北寄りの風が強く、彦根では昭和28年の13号台風と同じ値、北西21.0m/s(13号北21.0m/s)で最大瞬間風速は北西32.0m/s(13号北29.0m/s)であった。

彦根 最低気圧 977.3mb 17日20時50分

最大風速 NW 21.0m/s

17日22時30分

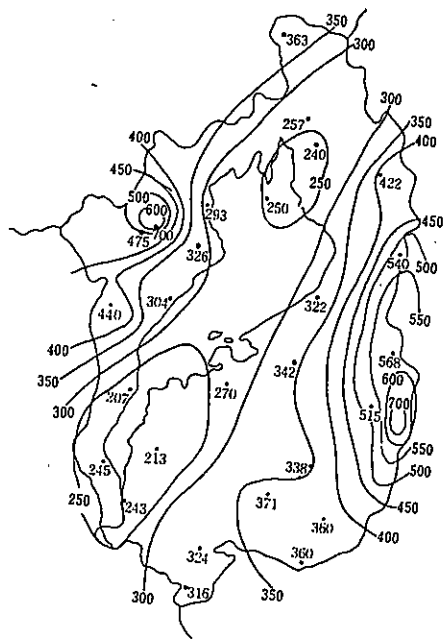
最大瞬間風速 NW 32.0m/s

17日22時28分

総降水量 322mm 13～17日

政所 " 515mm 13～17日

降水量分布図
昭和40年9月13～17日

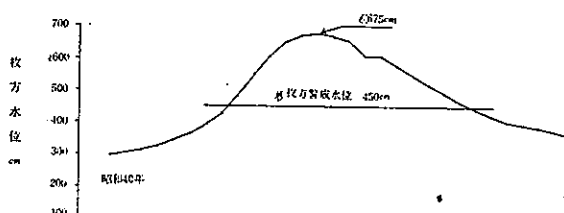


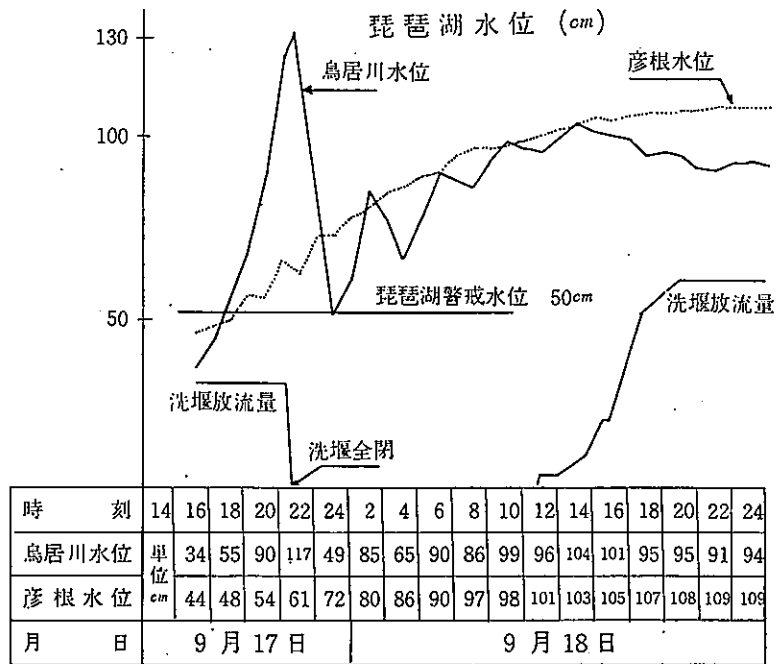
警戒状況

風雨・洪水注意報発表	17日13時50分
暴風雨・洪水警報	" 17 16 00
洪水警報	" 18 01 00
同上 解除	18 06 15
強風注意報発表	18 07 30
同上解除	18 17 00

県は、台風が本県襲来必至との状況のもとに、

17日11時に緊急幹事課長会議を開催し、非常体制について協議打合せを行なった。16時暴風雨洪水警報の発令と同時に緊急部長会議を開催し、災害対策本部を設置した。





昭和40年

被害状況

9月13日以来の秋雨前線降雨により、河川は相当出水していたところへの暴風雨であり、各河川は急速に増水し、17日19時頃から警戒水位を越え始め、23時頃には各地で堤防の決壊・破損をきたし、随所で住民の避難が行なわれ、交通機関の全面停止と通信・電灯線の障害と相まって県民を極度の不安に至らしめた。

被害は県下全域にわたり、家屋の全半壊をはじめ、田畑の流埋没・冠水などによる農作物被害も甚大であり、とくに琵琶湖水位の上昇による湖周辺地帯の稲作冠水・浸水による被害は言語に絶するものとなり、23号台風の被害と相重って農家の悩みは深刻なものであった。

県は、住家被害の多かった近江八幡市ほか3市町に災害救助法を適用し、また、湖西地方および野洲川下流に自衛隊の災害派遣を要請して応急対策実施上絶大の支援を得た。この活動において守山町今浜新田における孤立地帯住民17世帯99人の救助作業中、大津駐とん地第109教育大隊土手善夫一尉が殉職した。

災害救助法適用状況

市町村名	避難所			炊出し 給食延数	学用品支 給児童数	生活必需品 交付世帯 数	応急 仮設住宅	住宅の 応急修理
	箇所数	延人員	期間					
近江八幡市	4	744	自 17日 至 19日	3,053	28	422	2	25
八日市市				2,490		148	2	1
甲南町	4	558	自 17日 至 22日	566	94	126		
秦荘町	10	2,619	自 17日 至 19日	4,614	63			

主要河川時間別出水状況

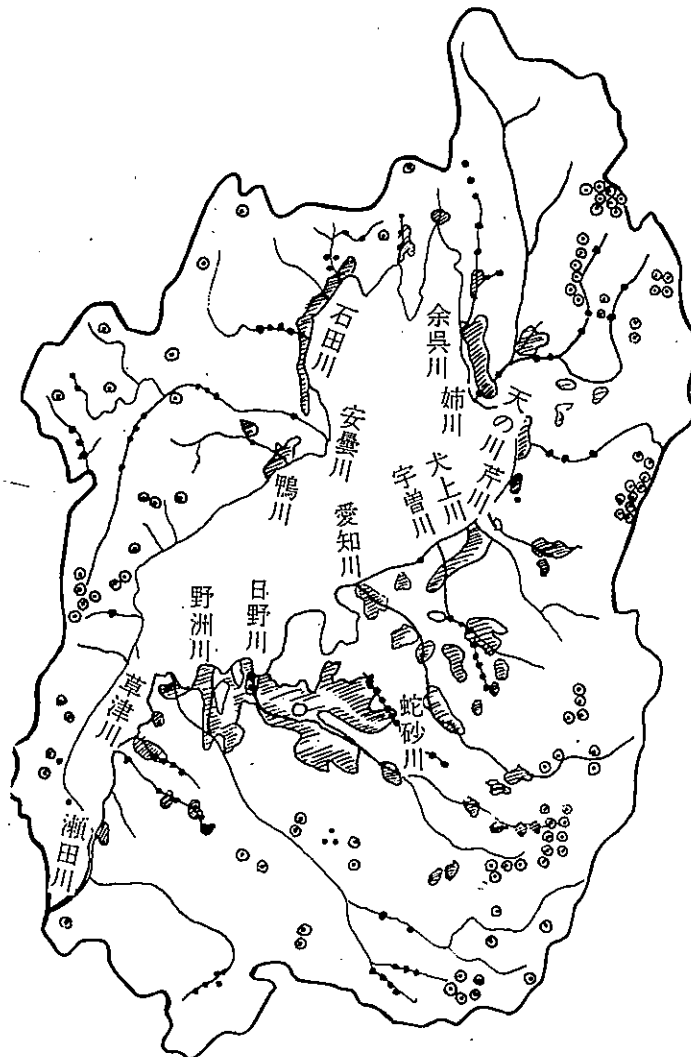
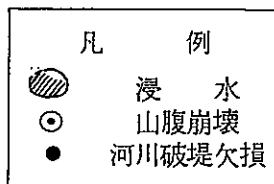
河川名	野洲川		愛知川		日野川		姉川		高時川		安曇川	
量水標号	17		29	32	22	25	49	50	57	69	70	
位置	水口橋	野洲橋	紅葉橋	御幸橋	別所橋	桐原橋	国友橋	難波橋	井明神橋	船橋	安曇大川橋	
通報	1.2	0.2	1.9	1.0	0.8	2.3	1.3	1.5	0.75	1.0	0.7	
警戒	2.4	1.2	2.2	1.5	1.5	3.3	2.0	2.0	1.2	1.5	1.5	
9月17日	時											
	12						0.92					
	13											
	14							0.5			1.30	
	15			1.20					0.40		1.40	
	16			1.30	1.35						1.50	
	17		- 0.3		1.55						1.70	
	18			1.50		1.40	1.60		0.75		1.80	
	19	0.35	-0.10	2.60	1.70	1.70	2.00	1.25	0.70	1.00	2.20	
	20	1.00	+ - 0	3.00		2.50		1.70	0.90		2.20	
	21	1.60	0.3	3.50	3.70	2.50	3.80	1.80	1.40	1.35	2.30	
	22		2.40	3.60	4.00			2.15	1.70	1.55	2.70	
23	1.80	2.8	3.30		2.00	6.30	2.05		1.65	3.10		
24		2.50	3.20	3.30			1.80	2.50	1.65	2.00		
9月18日	1		2.40	2.90	2.90	1.20	5.30	1.70	2.50	1.65	1.50	
	2	1.20	2.30	2.70				1.65	2.50	1.50	1.20	
	3		1.40	2.50		1.10		1.45	2.30	1.35	1.10	
	4	0.90	1.30	2.10	2.40	1.00		1.38	2.25	1.10	1.00	
	5			1.80		0.90		1.30	2.15			
	6				1.8			1.30	2.10			
	7	0						1.25	2.00			
	8											

被害表 (災害対策本部調)

区分	数量	被害額(千円)	区分	数量	被害額(千円)
死者	3人	403,020	非住家損壊	5,153棟	178,060
負傷者	19 "		農地流埋没	1,686ヵ所	439,700
住家			農業用施設		614,060
全壊	63棟		農作物		4,211,248
半壊	329 "		水陸稲	57,528 ha	
床上浸水	1,662 "		野菜	1,482 ha	
床下浸水	12,282 "		果物	309 ha	
一部損壊	7,086 "		その他	1,398 ha	

区 分	数 量	被害額(千円)	区 分	数 量	被害額(千円)
山林		598,442	養 殖	64件	
林 道	241ヵ所		その他の農業施設	134 "	45,730
新生崩壊地	184 ha		土 木 施 設	2,523ヵ所	3,465,361
拡大崩壊地	69 "		学校公民館等	271 "	29,695
施 設	10ヵ所		文 化 財 等	29件	42,684
畜産関係		26,330	社会福祉施設	65ヵ所	3,583
水産		90,600	衛生関係施設	28 "	7,632
漁 港	1ヵ所		商工関係施設	222 "	144,100
漁 船	89隻		その他の公共建物		43,499
漁 具	19,031件		計		10,343,744
施 設	51 "				

被 害 状 況 図



雪 害 編

本県の積雪の概要

日本付近が西高東低の冬型気圧配置になり、北西の季節風が吹き出すと、日本海側はよく雪が降り、太平洋側は晴天がつづく。

このようなとき、本県北部でもよく雪が降る。特に四囲に高い山脈があり、一大盆地の中に大湖がある特異な地形であるために、降雪日数や積雪分布が各地で大きな相違がある。

最近の統計によると、降雪日数は北部の山間地帯で50～60日、湖岸平野では30～40日で、南西部に向かって少なく、大津付近が最少地域で20日未満になっている。また積雪日数は、北部山間地帯では80～120日で、降雪日数の約2倍の期間雪におおわれているが、湖南大津付近では10日に満たず、北部の多雪地帯と100日に及ぶ大きな相違を示している。大体、県総面積の3分の1は年間60日ぐらい、2分の1は30日ぐらい積雪におおわれていることになる。

次に積雪分布についてみると、その時の気象状況によって相違はあるが、大別して北雪、中雪、南雪の3つの型に分けられるようである。

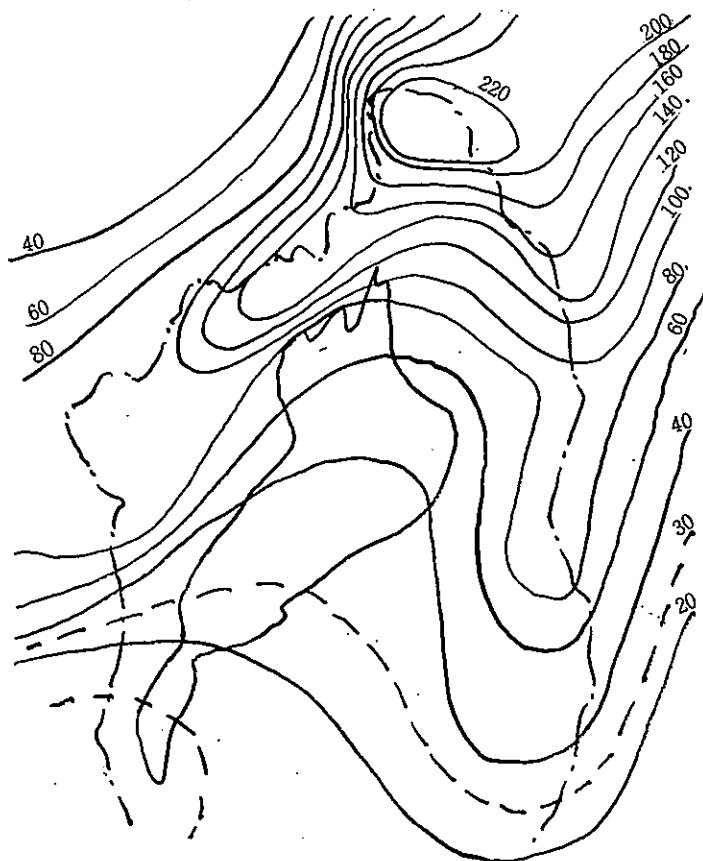
北雪は、湖北地方と湖東山間部に多雪地帯があり、南部では小雪がちらつく場合で昭和38年1月豪雪はこの型で、伊香郡では積雪4mを越し、北部地方は70～80日に及ぶ積雪で、各村落が孤立し、食糧や医療品が欠乏して県や関係市町村が救援に当たっていたが、大津付近ではわずかに10cm足らずの積雪状態であった。

中雪は、県の中部地帯に多雪地帯があり、北部と南部に少ない場合で、昭和27年2月5日の雪がこの型で、湖西市場と湖東佐目を東西に結ぶ地帯に80～100cmの多雪地帯ができ、その他の地方は少なかった。

南雪は、湖南大津付近に多雪地帯がある場合で、昭和11年2月5日の雪は、大津35cmが最深で、その他は全般に少なく、この型に属するものである。

最深積雪の記録は、中河内で565cm（昭和11年3月2日）、彦根では93cm（大正7年1月9日）で、各地の平均最深積雪は分布図のとおりであり、また、観測開始以来の各地の最深積雪と主要地

平均最深積雪 cm
(最近30年間の平均)



点の年別最深積雪は資料編に挙げた。

昔の雪に関する記録をまとめたものとしては、中央气象台・海洋气象台編纂の日本気象史料と同総覧があるが、これによると、本県に関するものは少ないが、京都については大雪のあった記録が多いので、恐らく本県でもこの編に収めたもの以外に、明治年間も含めて数多く大雪があったものと推察される。

最近では1mを越す大雪が積っても、昔のように家がこわれたり凍死したりすることは少なくなったようであるが、国鉄新幹線・名神高速道路、国道1号線、同8号線など、産業交通の動脈の多い本県では、僅かな積雪でも交通に及ぼす影響は大きく、除雪車の出動や、凍結防止の薬剤散布などによる交通確保が積雪対策の中心となってきた。また、電線着雪や融雪洪水についても充分注意しなければならない。

現在、大雪注意報は、新積雪30cm以上、大雪警報は60cm以上と予想されるときがその発表基準になっている。

慶長10年(1605)

12月21日(1606.1.29)

この日より厳寒打ち続き、大雪降る。中にも江州の大雪、深さ8尺ばかりという。〔東浅井郡志(当代記)〕

慶長20年(1615)
元和元年

1月15日(2.12)

夜中大雪。近江・美濃・和泉は、其のつもる事4尺余なりとぞ。〔徳川実紀〕

1月17日(2.14)

此日より雪ふること3日に及ぶ。〔徳川実紀〕

天和2年(1682)

12月27日(1683.1.24)

大雪年越えて降り止まず、畑内北部家倒れ死人あり、牛馬飢に及ぶ。〔愛知郡志(森野記録)〕

元禄元年(1688)

大雪。〔彦根市史〕

延享2年(1745)

冬より春に至り、大雪5尺余。〔彦根市史稿〕

明和6年(1769)

12月(1770.1)

彦根大雪、壊家多し。〔彦根市史稿〕

明和8年(1771)

彦根大雪。〔彦根市史〕

安永3年(1774)

12月(1775.1)

大雪にて家潰れ^{つぶ}申候。19日鹿取り致し候ところ、^{おびただ}夥しく討ち捕り申候。〔愛知郡志(山本記録)〕

天明 3 年 (1783)

冬

大雪、海津にて5尺計り、山中村にては棟よりも高し。〔高島郡誌〕

文化 8 年 (1811)

1月(1~2)

正月朔日より雪ふり。2月20日迄^{まで}段々降り、鹿狩山林に多く候。其の総数千余と申伝え候。村にて五十、六十又は百も取る村も有り。〔愛知郡志(中西記録)〕

文化 9 年 (1812)

12月(1813.1)

12月20日頃より翌正月に^{わた}亘り大雪、海津平地にて5尺計り積る。3、40年来の大雪と称す。〔高島郡誌〕

文政元年 (1818)

12月(1819.1)

晦日より雪降り明け、正月大雪、壊家有り。〔彦根市史稿〕

文政 2 年 (1819)

1月(1~2)

彦根・長浜、積雪最も甚だしという。〔東浅井郡志(村角日記)〕

文政 7 年 (1824)

11月21日(1825.1.10)

大雪。彦根・長浜積ること7、8尺なりという。〔東浅井郡志(村角日記)〕

12月20日(1825.2.8)

夜大雪、5尺余。〔彦根市史稿〕

文政 8 年 (1825)

12月(1826.1)

海津にて積ること7尺。〔高島郡誌〕

大雪1丈。〔東浅井郡志(村角日記)〕

文政 10 年 (1827)

大雪。〔東浅井郡志(村角日記)〕

天保 12 年 (1841)

1月(1~2)

大雪。〔東浅井郡志(村角日記)〕

安政 4 年 (1857)

12月8日(1858.1.22)

大雪ふる。此の雪にて東方寺の門つぶれる大雪なり。〔愛知郡志(平松山田記録)〕

万延 2 年 (1861)

11月~翌1月(12~翌3)

豪雪。深さ5尺、稀有の雪害。〔彦根市史〕

文久三年 (1863)

11月 (12月)

6日雪降り始め3尺ばかり積もる。26日から28日にかけて降る。深さ5尺に達し、その後も降りつづき、冬から春にかけて容易に融けず、交通杜絶して町内の店々品切れにて副食物欠乏し、毎日々かやくなき味噌汁ばかり。また醤油や味噌をなめ、日々代わる物なく、梅干のある家は尤も多幸なりと云われたり。春に至り雪消えたれば、田畑の野菜は殆ど野ねずみの食せるため、無事なるものなく、稀有の雪害なり。〔彦根市史稿 (古老坐談会の実見談・平松山田記録)〕

大雪、海津にて凡そ6尺積もり、剣熊村にて8尺余に及ぶ。〔高島郡誌〕

大雪にて家潰れ立木折。

霜月6日に初雪降り、2~3尺計り降る。また、26・27・28・29日と降る。およそ5尺計り降る大雪なり。〔愛知郡志 (平松山田記録)〕

大正六年 (1917)

1~3月

1月は、湖北・湖西・湖東の各地は降雪が頻繁にあり、月中の降雪日数はおおむね18、9日を数え、伊香郡中河内では、降雪をみなかったのは月を通してわずかに4日に過ぎなかった。湖南地方においても、草津・野洲の一部を除いては、降雪日数は10日内外に達し、積雪は上・中旬は多くはなかったが、下旬の下半旬においてはまれな大雪となった。各地の積雪状況は、湖北・湖西の山間部で150 cm、中河内では235 cmに達した。

2月の雪は、彦根測候所創立以来未曾有の大雪で、彦根付近でも約90cmに達し、湖北の山間部では3 mを越えた所もあった。

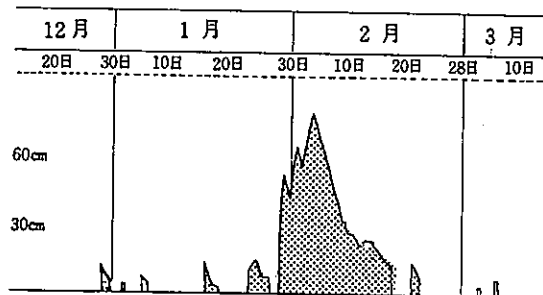
この1月・2月の大雪で交通の杜絶、家屋の倒壊、樹木の折損、あるいは列車の延着、運転中止など、その被害は大きかった。

3月に入ってもなお降雪は頻繁で、中河内では平年では3月下旬には積雪を見ないが、この年は3月末になっても150 cmに及ぶ積雪を見ている。

各地の最深積雪 cm

観測所名	1月	2月	3月
中河内	235	332	270
木之本	123	125	21
彦根	55	82	9
八幡	15	14	0
大津	13	5	0
今津	90	103	23

大正六年 (1917)
積雪日変化図 (彦根)



12月

この月は、県内各地にしばしば降雪があり、湖北地方では降雪日数20日内外を数えた。積雪は中旬にはそれ程多くはなかったが、下旬に入ると大雪となり、湖西、湖北の山岳地方は120 cm内外、中河内では実に300 cm以上に達した。この地方で12月にこのような積雪を見たのは珍しい現象であった。

各地の最深積雪 cm

中河内	310	彦根	38
木之本	92	今津	42

大正7年 (1918)

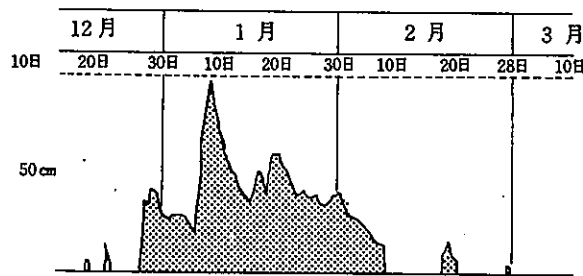
1月

1月の県下各地の積雪は、湖南地方では平年と大差はなかったが、湖北・湖西・湖東の各地では彦根測候所創立以来の大雪で、湖東山岳地帯および愛知川以北は月を通して積雪でおおわれ、伊香郡中河内は最も深く、最深365cmに達し、湖東の平地においても100cmを越え、交通の杜絶、家屋の倒壊、樹木の折損など数多くの被害が生じた。ことに7日夜より8日午前にわたっての風雪のため、8日午前八幡一河瀬間、彦根一河瀬間、米原一柏原間の各所において列車は運転不能となり、北陸線は連日列車が延着、貨物列車の運転中止など、被害は甚大であった。

1月の各地の最深積雪は次のとおりである。

観測所名	最深積雪 cm	観測所名	最深積雪 cm
中河内	365	愛知川	61
吉槻	193	八幡	25
谷口	158	今津	86
木之本	109	北小松	71
白谷	180	日野	32
市場	136	水口	13
坊	120	土山	6
政所	118	多羅尾	10
佐目	139	野洲	12
山上	108	草津	12
虎姫	94	石山	2
長浜	118	大津	4
竹生島	45	堅田	21
彦根	93		

大正7年 (1918)
積雪日変化図 (彦根)



大正11年 (1922)

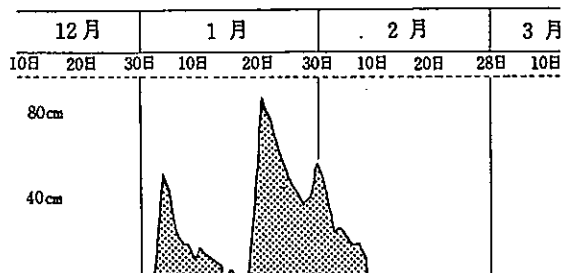
2月 大融雪

前年の12月24日からこの年の2月8日に至る46日間 (中2月1日降水なし) 降り続いた雪は、彦根測候所創立以来の現象で、湖北・湖西および湖東の地を埋め、2月上旬に至っても平地で30cm余、山間部で1m内外の積雪であった。

2月10日、揚子江流域に低気圧が現われて徐々に東進し、11日朝朝鮮南部をかすめて日本海に入った。本県地方は南または南東の風が次第に強まり、気温も著しく上昇して、雷雨を伴い、融雪を容易にした。このため平地はもちろん、山岳地の積雪も一時に融解し、湖北地方では高時川・余呉川、湖西地方では安曇川流域などが増水、はん濫するに至った。

余呉川筋では増水480cm以上に達し、11日正午ごろ北富永村雨森地先で堤防15m余決壊、柏原・落川・渡岸寺・高月な

大正11年 (1922)
積雪日変化図 (彦根)



どの部落は浸水し、甚大な被害を被った。

高時川では増水 2 m に達し、一時危険にひんしたが、地元民の活動により堤防の決壊は免れた。

安曇川流域では広瀬村堤防が決壊寸前になったが、青年団・在郷軍人などの出動により半壊で防止することができた。

12月中旬の大雪と電線着雪

12日湖南に、19日湖北を中心として降った雪は、電話や電燈線を切断、電柱を倒し、その被害はばく大なものであった。前者は湖南水口から日野・八日市・愛知川・河瀬・能登川・高島に至る間に、後者は湖東彦根から湖北木之本及び湖西今津に至る地方であった。

12日の降雪状況

彦根地方は11日早暁よりみぞれが降り、12日午前2時ごろから雪になり、翌朝には止んだ。降雪中の気温は0.7℃、風速1~2m/sであった。

各地の積雪cm

彦根	7	12日	八幡	30	12日
愛知川	38	13日	北小松	21	13日
日野	85	13日			

19日の降雪状況

18日午前10時ごろに降り出した雪は、夕刻一時止んだが、19日夜半過ぎから再び降り始め、翌日昼過ぎまで続いた。風は概して弱く、雪の密度は0.1であった。

各地の積雪cm (20日)

彦根	39	今津	44
春照	149	市場	59
吉槻	180	坊	109
政所	168		

大正12年 (1923)

1月3日

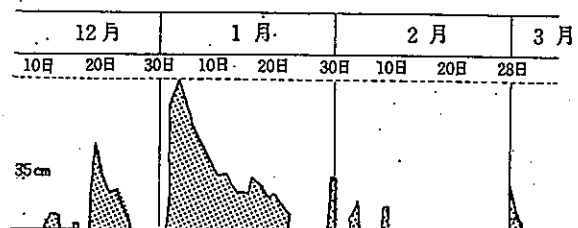
12月29日朝6時、満州北部に現われた低気圧は発達しながら東進し、31日朝北海道に進み、1月1日千島方面に去った。一方大陸には優勢な高気圧があつて典型的な冬型気圧配置になり、6日まで持続した。

このため彦根地方では元旦から強い季節風が吹き、夜に入って雪が降り出し、3日夜半ごろには止んだ。最深積雪は3日午後10時で80cmで大正7年1月9日の93cmより第3番目の深さであった。

各地の積雪cm (3日)

彦根	80	今津	58
春照	117	市場	91
吉槻	162	坊	112
政所	150		

大正12年 (1923)
積雪日変化図 (彦根)



2月16日 融雪出水

14日朝、土佐沖に現われた低気圧は、16日朝6時には紀淡海峡に進み、近畿地方を経て東海道沖を八丈島西方に去った。

この低気圧の影響で、本県では14日午後3時過ぎから雨が降り出し、15日夜よりにわかに気温が上昇し、16日早朝には一時強雨があり、夜には止んだ。

彦根の総雨量は31mm、最高気温は10.3℃でこの月の極であった。中河内では最も多く72mmを測った。

この気温上昇と降雨のため、湖北山間地帯に前年の12月から降り積もっていた根雪は一時に融け、高時川でははん濫甚だしく、堤防が決壊した。

大正14年(1925)

1月29日 着色の雪

29日夜に入って降り出した雪は、翌30日朝10時までに積雪8cmとなった。(雨量7mm)この日の雪は平常の雪と異なって、茶褐色を呈していた。

この原因は降灰によるものと考えられ、当時彦根測候所が調査した結果が次のように記録されている。

○降灰の時刻とその継続時間

夜中の現象でしかも降雪中であつたので、降灰の時刻を正確には観測できなかったが、当時、積雪中に混入していた降灰の分布状況より推定すると、降灰は午前2時半ごろから始まり、5時半ごろに終り、その継続時間は約3時間内外と考えられる。

○降灰量・降灰の形と色及び比重

10cm平方につき0.29g。手ざわり柔らかく、洗粉に似て茶褐色、乾燥して粉末の比重2.8。

○降灰の分布

降灰は大津・草津地方を除く県下全般で、南方に稀薄で北方に漸次濃厚であつた。最も濃厚であつた伊香郡片岡村では、前夜来の降雪が約30cmであつたが、白味少しも見えず、全土茶褐色を呈し、一升の降雪中から約5勺(0.09ℓ)の泥土を得たという。また高島郡今津町では着色雪の深さ8cm余あり、融解後屋上に厚さ3mm余の灰状粉末をとどめたという。

大正15年(1926)

12月23日 電線着雪

湖東地方では23日朝から雪が降ったり止んだり、あられを伴い、午後には雷鳴を交え、複雑な天候となった。夜半になって降雪は一時止んだが、24日未明から再び降り出し、午前10時には積雪25cmを観測した。気温は、23日午前10時までは氷点下を示したが、次第に上昇して概して温暖を呈した。

このため、23日から降り積もった雪は密度大きく、風速も弱かつた関係で電燈、電話線に付着し、ついに24日夜半になって断線、彦根市内は一面暗黒となり、通話も絶たれるなど、大きな被害を受けた。

この雪の密度は0.1で、雪の付着した電燈線は直径7.5cm位であつた。

昭和 2 年 (1927)

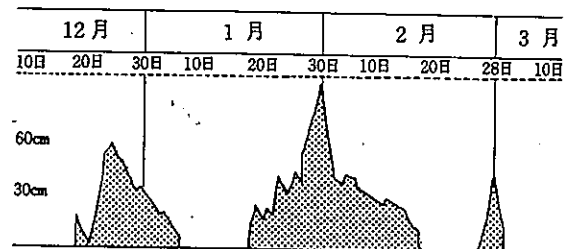
1 月

中旬になり、大陸高気圧が著しく発達し、冬型気圧配置になったので、季節風が卓越し、各地方とも例年以上の積雪を見た。とくに中河内では月を通して積雪があり、その最深積雪は1月30日に286cmに達し、大正7年以來の記録を破った。その他湖北山間部は、各地とも過去の最深記録を越えて150cm~200cmの積雪になった。

この大雪のため、同地方は交通^{とぜつ}杜絶、通信障害をはじめ桑樹、竹林等にも被害を受けた。

各地の最深積雪 cm			
中河内	286	八幡	25
木之本	168	大津	6
彦根	80	今津	101

昭和 2 年 (1927)
積雪日変化図 (彦根)



昭和 6 年 (1931)

1 月 10~12 日

9日朝、土佐沖と若狭湾の沖合にあった低気圧が発達して東進し、三陸東方海上に出、大陸の優勢な高気圧が日本に張り出して来て冬型の気圧配置になり、西11.9m/sの強風が吹いて気温も急降し、11日終日大雪で、12日朝ようやくやんだ。

この暴風雪は、今冬最初の大雪となり、12日伊香郡中河内の90cmを最高に、木之本35cm、市場75cm、彦根45cm、八幡5cmと湖北・湖西・湖東地方に多く、電話・電燈線の切断、汽車の延着等交通に大きな支障を起こした。

12月13日

この冬に入って初めての寒気が襲来し、気温は著しく低下し、湖国一帯に積雪をもたらし、湖西北部から湖北地方にわたっては相当の積雪を見、初雪としては珍しい深雪であった。この日同地方では夜来の降雨は早暁より雪に変わり、風強く、午前10時に至り既に30cm内外の積雪を見た地方も少なくなかった。

午後に入りますます猛吹雪となり、交通は全く^{とぜつ}杜絶し、電話線は切断され、通信も^{とぜつ}杜絶する状態であった。

この雪で伊吹山において1人、東浅井郡東草野村において2人、伊香郡丹生村において1人の凍死者を出した。

昭和 9 年 (1934)

1 月・2 月

1月は大正7年1月に次ぐ十数年来の大雪であった。湖東以北及び湖西地方は連日にわたる降雪のため、交通は一時全く^{とぜつ}杜絶し、湖東地方ではバスその他の運転が不能になる状態で、交通・通信・電燈の障害のほか、次のような被害があった。

伊香郡で雪崩れのため即死者1人、行方不明2人、家屋3戸埋没、工場1棟全壊。

東浅井郡で1人凍死、家屋2戸全壊、1戸半壊、非住家1戸全壊。

伊吹山で雪崩れのため1人行方不明。

高島郡で材木運般中1人凍死。

坂田郡六荘村で家屋1戸全壊、長浜で家屋1戸半壊。

愛知郡で隔離病舎1棟全壊。

犬上郡久徳村で公会堂1棟、多賀村で農業倉庫1棟全壊。

その他湖東・湖北・湖西の各地で屋根の一部破損、野小屋などの全半壊多数あり。

1月の各地の最深積雪cm

中河内	438	八幡	45
木之本	170	大津	12
彦根	55	今津	130

昭和11年(1936)

1月

この月は、降雪日数並びに積雪日数共に平年より多く、特に湖北・湖西地方に著しく多かった。最深積雪は中河内の490cmを最高に、次いで吉槻の210cm、木之本175cmなどで、中河内・吉槻・木之本の各地は過去の最深記録以上の積雪を観測し、まれにみる大雪であった。

2月

1月以来の厳寒と大雪の襲来により積雪多く、北部の大部分は月を通して積雪があり、南部地方においても10日以上積雪を見、各地とも平年より著しく多かった。積雪の最深は中河内560cm、白谷260cm、吉槻222cmで、100cm以上を測ったのは、下草野・谷口・木之本・市場・佐目・今津の各地で、湖南大津地方でも41cmの積雪を観測するなど、近年まれな大雪であった。

雪害状況

伊香郡をはじめ高島・東浅井・坂田郡地方に特に著しく、山林・農作物・家屋等の被った損害は甚大なものであった。その概況は次のとおりである。

人及び家屋の被害

死者	6人	住家	全壊	38戸
傷者	2 "		半壊	38 "
計	8 "		埋没	4 "
		非住家	全壊	7 "
			半壊	4 "
		農家用建物	全壊	258 "
			半壊	384 "

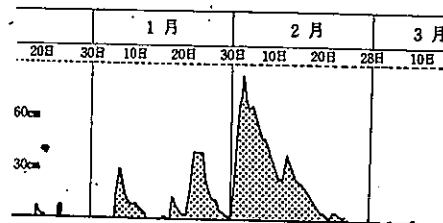
農作物の被害

種別	被害見積価額	種別	被害見積価額
山林	34,547円	竹林	1,246,774円
水田裏作農作物	90,291 "	畑作農作物	493,437 "
果樹	73,877 "	茶樹	43,362 "
桑樹	176,839 "	その他	40,682 "
		合計	2,199,809 "

各地の最深積雪 *cm*

観測所名	1月	2月	観測所名	1月	2月
中河内	490	560	今津	70	130
吉槻	210	222	北小松	32	25
木之本	175	190	日野	8	24
市場	88	130	水口	2	21
政所	57	96	土山	6	33
竹生島	35	71	草津	2	30
彦根	39	85	石山	1	21
愛知川	43	43	大津	5	41
八幡	8	15	堅田	9	27
			多羅尾	21	37

昭和11年 (1936)
積雪日変化図 (彦根)



●昭和 14 年 (1939)

1月

1月における降雪日数は、各地とも平年より多く、彦根で22日、また積雪日数でも湖南地方の一部を除いては各地とも平年より多く、積雪は中河内の190*cm*を最深とし、白谷115*cm*、市場102*cm*、彦根52*cm*等で湖東平地愛知川の87*cm*は観測開始以来の記録であった。

昭和 15 年 (1940)

1～2月

1月9日は彦根地方では本年の初積雪で10*cm*、20日は29*cm*の積雪があった。その後2月末まで連日深雪におおわれた。その最深は、彦根で77*cm* (2月9日)、中河内で315*cm* (2月9日)、政所229*cm* (2月10日)、長浜84*cm* (1月31日)等で、各地で雪害があった。

昭和 20 年 (1945)

1～3月

1月の彦根における降雪日数は25日で、雪が降らなかった日は4日、5日、11日、14日、30日、31日のわずか6日であった。このため積雪日数は27日、その最深積雪は47*cm* (26日)であった。

2月は降雪日数21日、積雪日数28日、最深は6日の65*cm*で、また3月は降雪日数11日、積雪日数10日、最深は11日27*cm*であり、各地で雪害があった。

各地の最深積雪 *cm*

	1月	2月	3月
中河内	410	510	450
木之本	145	141	103
彦根	47	65	27
八幡	13	35	5
今津	220	290	200

12月19日

18日、日本付近は典型的な冬型気圧配置になったので、北部では1日中雪が降り続き、同日22時には積雪22*cm*を測った。この雪は19日午前中降り続き、最深積雪は57*cm*で、12月としては測候

所創立以来の最深であった。

各地の積雪 cm (19日)

木之本 36

彦根 57

八幡 一

今津 80

南部は積雪なし

昭和 23 年 (1948)

1月17~18日

17日夜から、今津町付近では本年初の大雪となり、18日朝10時現在、今津24 cm 、三谷60 cm 、海津100 cm 、木之本77 cm 、彦根23 cm 、奥マキノでは240 cm の積雪であった。このため省営バス小浜線は不通、江若線はかろうじて海津まで運転、通勤客は足を奪われた。

昭和 24 年 (1949)

1月9~10日

9日午後から夜にかけて各地で雪が降り、彦根地方は今冬初の積雪となり、柳ヶ瀬80 cm 、中之郷55 cm 、木之本30 cm の積雪で、伊香郡一带にわたって電柱の倒壊、断線などをみた。

1月16~17日

14日から15日にかけて日本海を東進した低気圧が、16日には千島付近で発達し、典型的な冬型気圧配置になった。湖北地方では、16日夜半頃から雪が降り出し、17日正午には長浜市で30~70 cm も積もり、木之本49 cm 、彦根18 cm の積雪となり、列車の運転休止、減車など交通機関が乱れた。

2月5~6日

3日から4日にかけて日本付近を通った2つ玉低気圧は、5日には三陸沖に出て発達し、冬型気圧配置になった。このため本県北部では5日から6日にかけて吹雪となり、これまでの暖冬異変は吹き飛ばされた。7日各地の積雪は、海津25 cm 、西庄・百瀬25 cm 、今津20 cm 、三谷・朽木70 cm で、国鉄バスは不通になった。

彦根 最大風速 NNW 14.5 m/s 6日1時20分

最大瞬間風速 WNW 22.1 m/s 6日1時23分

昭和 26 年 (1951)

1月14日

昼頃から降り出した雪は、いつもは数 cm 程度しか積もらない湖南大津方面でも、わずか2、3時間で10 cm 内外という珍しい大雪となった。

各地の積雪状況 cm

マキノ 45

甲賀郡山間部 30~45

奥マキノ 76

栗太郡方面山間部 30

伊香郡方面 12~15

平地 12~15

犬上・蒲生郡方面山間部24~30

平地 9~15

このため東海道線は、各列車が4～5時間延着。甲賀郡方面では京阪へ向かうトラックが路上で一時立往生し、大津・八幡方面でも電話不通箇所がでた。

2月15日

2月13日東支那海に発生した低気圧は、14日から15日にかけて日本の南岸を東進し、非常に発達して中心気圧960mbという台風にも比すべき値を示した。

この低気圧は、大雪の余り見られない太平洋側に大雪を降らせ、各地で暴風雪となり、交通機関は大混乱をきたした。

彦根 最大風速 NNW 19.6m/s 15日01時00分

最大瞬間風速 NNW 23.8m/s 15日02時09分

積雪 多羅尾33cm 大津6cm 彦根—

昭和 27 年 (1952)

2月2～5日

日本付近は、2月2日ごろから典型的な冬型気圧配置になったので、県北部では2日午後から雪が降り出し、夜半ごろまで続いた。3日には一時小降りになったが、4日夜から本格的に雪が降り、5日一ぱい降り続いた。

この雪は、県中部地帯に多雪地があるいわゆる中雪型で、彦根地方で70～100cm、市場115cm、木之本付近30cm内外、大津1cmで、各地で交通機関などに雪害があった。

昭和 28 年 (1953)

1月12～16日

12日から降り出した雪は、16日まで降ったり止んだり、湖北・湖西一帯は70～100cmの大雪となり、列車は運休・立往生が相つぎ、湖北山間部小学校は臨時休校が続出した。

彦根地方 14日、平地で50cm、関電彦根営業所管内で高圧線の断線、電柱倒壊20本、その他引込線の被害大きく、また通勤者、通学生達は、列車ダイヤの混乱で13日夜から旅館に泊まり込む者もあった。

米原地方 10年振り的大雪に見舞われ、米原駅は列車の運休、立往生などで大混乱した。

長浜地方 吹雪がはげしく、バス路線は全部運休した。

昭和 30 年 (1955)

1月6～7日

6日から降り続いた雪は、7日朝高島郡北部山間地帯で200cmの積雪となり、今津町で100cmという今冬の最深積雪を見た。この雪で、バス・諸車は止まり、江若鉄道も早朝からラッセル車を出し、通勤者はまったく足を奪われた状態であった。

1月10～11日

湖北地方は、10日夜から11日朝まで吹雪におそわれ、伊香郡柳ヶ瀬80cm、東浅井郡山東部40cm、近江長岡25cmの積雪があり、国鉄のダイヤ・各バス路線の運行が乱れた。高島地方でも北部山間部で80～120cm、平地30～40cmの積雪になり、国鉄バス、江若バスも各所で折返し運転となり、人々の足を奪った。甲賀郡一帯は3～15cmの積雪で、気温が低いので道路が凍結し、スリップで危険のため鈴鹿峠などが諸車不通になった。

1月21日

20日夜半からの降雪により、21日朝には高島地方は雪におおわれ、北部山村民達は足を奪われた。彦根・米原・関ヶ原付近では30cm、多賀町桃原60cmで、坂田郡柏原村梓川橋付近中山道路上で、名古屋方面から京阪神に向かうトラック約60台が30cmの積雪にはばまれ、猛吹雪の中で立往生した。

1月26日～27日

26日夜半から雪となり、27日朝甲賀地方は平たん地20cm、山間部30cmで、各バス路線は運転休止、鈴鹿峠はスリップを恐れたトラック約100台近くが午前中立往生した。大津市内も約5cmの積雪で、逢坂山峠は自動車が運行不能となった。

2月20日

20日早朝から湖北湖西地方を襲った雪は、21日にかけて猛吹雪となり、北陸線は各列車とも遅延し、湖北湖西一帯は交通が一時まひした。

各地の積雪状況cm

	1月7日	1月11日	1月21日	1月27日	2月21日
木之本	36	23	26	9	47
彦根	10	13	14	5	20
今津	73	46	52	29	40
北小松	48	16	3	10	15
土山	14	8	—	20	8

昭和31年(1956)

12月11日

湖北地方は10日夜から雪となり、11日朝も降ったり止んだり、今津町平たん部で8cm、北マキノ30cm、海津で10cmであった。

12月16日

湖南地方を除き各地で大雪となった。伊香郡木之本町日室土倉鉦山で飯場の倒壊、国鉄北陸線で列車の延着、その他の地方でバス路線が乱れた。

各地の積雪cm

彦根	20	八幡	5
木之本	36	大津	0
吉槻	72		

12月21～26日

北部では21日早朝から雪が降り始め、26日午前中まで降りつづいた。この大雪は12月としては大正11年以来のものであり、各地の24日の積雪は次のとおりであった。

木之本	95cm	春照	86cm
彦根	17 "	吉槻	140 "
今津	58 "	政所	165 "

被害状況

海津第3・4トンネルの中間及び木之本町音羽—杉本間で崖崩れ。^{がけくず}

木之本町・長浜市永久寺町・伊吹村・高月町などで、住家の損傷・非住家の倒壊・破損など30余件、電燈線の被害は22日、23日に特に多く、県北東部で配電線の断線20箇所。

昭和33年(1958)

1月17～18日

15日、日本海の低気圧が発達しながら東進し、18日は千島方面に進み、冬型気圧配置になり、西寄りの季節風が強まり、17日から18日にかけて湖北・湖西で大雪となり、18日には吉槻56cm、木之本38cm、今津24cm、彦根9cmの積雪で、交通や通信網が混乱した。

彦根 最大風速 NNE 12.5m/s 18日15時10分

最大瞬間風速 NNE 18.0m/s 18日14時53分

3月下旬の寒波

26日、低気圧が発達しながら日本の南岸沿いを東北東に進行し、その後から、バイカル湖付近の優勢な高気圧が南東に張り出し、27日から冬型の気圧配置となった。このため28日より気温は急降し、各地でかなりの降雪があった。30日には大陸の高気圧も移動性となり、雪は止み天気は回復した。

本県北部では28日午後から吹雪となり、南部でも雪がちらついた。多雪地は北東部山岳地帯で、積雪量は30cmとなった。29日は北西の風がやや強く、南部では晴れたり曇ったり、北部では時々雪が降り、晴間もあって大した雪は積もらなかったが、夜間は中部以北で猛吹雪となり、多雪地は北東部及び中部地帯で、30cm程度の新積雪があり、28日に比べ多雪地はかなり南に移動した。30日は、北部では次第に雪は止んできたが、彦根・今津を結ぶ線上では日中なお雪が降り続き、10～30cmの新積雪があった。

気温は28日より急に下降し、30日に平均気温の最低を示し、31日の日中は幾分寒さもやわらいだ。しかし、31日の朝は冷え込みが強く、各地で3月下旬としては観測所創立以来の最低記録を示した。

本県では3月下旬に雪が降ることは珍しくないが、このような大雪は非常に珍しく、彦根地方気象台創立以来の記録であった。

この寒波による被害は、麦・菜種・柿・玉ねぎ・えんどう・そらまめなど5億9千万円(農業振興課調)で、凍雪害としては空前の額に達した。これは暖冬で農作物の成育が早く、すでに幼穂や、つぼみをつけていたことが被害を特に大きくした原因である。被害の最も大きかったのは、穂ばらみ期の麦で、強い寒気で幼穂が凍死したもの(凍害)が全県の24%、これに雪による害を加えると、結局3割弱の減収で3億4千万円、また菜種はつぼみが開花寸前という状態であったので、35%の減収で1億9千5百万円に達すると見込まれた。

3月31日の最低気温(℃)

彦根	—5.8	今津	—5.9
木之本	—5.8	北小松	—2.5
八幡	—3.5	堅田	—1.0
水口	—5.0	大津	—1.5

昭和 34 年 (1959)

1月6～8日

4日、日本海と太平洋岸沿いを2つ玉となって北東に進んだ低気圧は、5日三陸沖に出てから一つになって992mbに発達し、その後に大陸の1056mbの高気圧が強い寒波を伴って日本に張り出してきた。この寒波の襲来で日本海側は大雪となり、本県では6日夕刻より雪が降り出し、8日昼ごろまで降りつづき、北部では70～80cmの積雪を見た。

この雪はこの冬最初の大雪で、北部各地で電話・電線に障害があり、列車・バス等の交通機関にもかなりの混乱を来した。

1月18～20日

満州から日本海に入り、発達しながら東北東に進んだ低気圧は、16日9時には992mbに発達して北海道西岸に接近、この後から大陸の1050mb以上の高気圧が日本に張り出してきた。このため本県では17日から10%内外の西寄りの季節風が吹き、18日午後北寄りの季節風が変わってから降雪が始まり、夕刻から夜半にかけて最も風雪が強く、北部山沿いで多いところは60～70cmの積雪をみた。

この雪は、この冬第2回目の大雪で、前回の経験から事前に警戒態勢にあったためか、交通機関の乱れも比較的少なかったが、異常低温により大津市内で水道の凍結、破裂等の被害があった。

各地の積雪cm

木之本	52	8日	64	20日
彦根	18	7日	12	19日
八幡	4	8日	1	20日
今津	46	8日	29	19日

昭和 35 年 (1960)

1月中旬

16日東支那海に低気圧が発生し、急速に発達しながら太平洋岸沿いを東北東に進み、17日早朝三陸沖に出たころには一段と発達して978mbとなり、台風にも匹敵する勢力となり、本県付近の西高東低の気圧傾度が急になった。

本県では、低気圧が関東沖から三陸沖に向かう16日夜から北西の吹き返しが強くなり、彦根の最大風速は17日2時40分及び3時10分に北々西18.8%、最大瞬間では2時30分に26.1%の強風となった。

このため北西部では吹雪となったが、概して降雪量は少ない方で、山沿いで20～30cmの積雪をみた。この雪と強風のため、彦根—今津の電話線は不通となった。

1月23～25日

21日、低気圧が日本海南部を東に進み、奥羽地方を横切って三陸沖に去り、大陸の高気圧が張り出してきたので季節風が吹き出し、裏日本一帯では大雪となった。

本県では、23日早朝から北部地方は風雪となり、雪は終日降り続いて24日に至り、西高東低の気圧傾度も急になって風もますます強くなり、彦根では14時30分に北々西14.0%を観測した。

この風雪によって国鉄北陸線の列車運休、遅延が出た。

昭和 36 年 (1961)

1月12日

11日午後から降り出した雪は湖東・湖南を中心とする珍しい大雪となり、12日も降り続いた。積雪は甲賀郡土山町の奥地で40cm、水口地方では20cmとなり、国道1号線鈴鹿峠・逢坂山峠で1000台以上の車が立往生し、近江八幡・八日市・蒲生・甲賀の一部で定期バスが運休、遅延により交通は混乱した。

1月19日

国道1号線鈴鹿峠は積雪10cmで凍結スリップし、トラック約1,000台が立往生した。

1月26日夕～27日朝

国道1号線鈴鹿峠は積雪30cmで、凍結スリップのためトラック約1,000台が立往生した。

2月16日

湖北の大雪のため、国道8号線で凍結スリップし交通が停滞した。

3月9日

国道1号線鈴鹿峠は低温と積雪3cmで、凍結スリップしトラックが立往生した。

昭和 37 年 (1962)

1月19日夜～20日朝

国道1号線鈴鹿峠は、積雪10cmと凍結のため、一時交通困難となった。

1月23日

湖南地方の大雪のため、逢坂山付近で交通が停滞し、鈴鹿峠も風雪となり通行不能となった。大津市内でも8時現在積雪20cmで、タクシーとバスは運休した。

1月25日

湖北地方の大雪(平地40cm、山間部1～2m)のため、国鉄バス木之本支所管内のバスは大きく遅延し、柳ヶ瀬線と土倉線は、山間部で一時不通となり、また国道1号線鈴鹿峠は凍結のため交通事故が続出した。

1月27～28日

湖北地方の大雪で、県道は今津一木之本線を除いたほかは交通が^{とぎつ}杜絶した。

1月30日夜～31日

国道1号線鈴鹿峠が、積雪と凍結のため交通が停滞し、8号線も福井一滋賀両県境で“なだれ”のため一時通行不能となった。その他湖北・湖西の各所で不通箇所が生じた。

昭和 38 年 (1963)

1月 豪雪

前年の12月31日からこの年の1月末までの約1箇月間にわたって、北陸地方を中心として、東北地方から九州に至る非常に広い範囲に降雪が持続した。この豪雪は、西高東低の冬型気圧配置が1箇月以上も続き、その間に近年まれにみるシベリヤ大寒波が襲来したため、西日本各地に異常低温が起り、また日本海でしばしば小低気圧や前線が発生したため、里雪型の降雪が顕著になった。北陸地方平野部では日降雪量30cm以上の日数が平年の2～3倍に及んだ。また山陰地方の山沿いや山岳部では、平年より100cm以上も多い積雪となり、九州・四国方面でも降雪日数

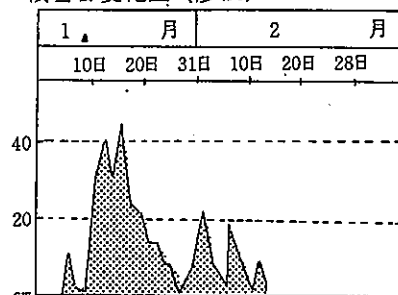
が多く、九州平野部でも30cm内外の積雪となった。

本県の状況

本県では1月8日から降り出し、特に12日午後から14日未明にかけて大雪となり、北部山間部で100cm以上、平野部で40cm以上、続いて15日夜半から16日朝方にかけても北部山沿いで50~60cm、平野部で20~30cmの降雪があり、積雪は北部山間部で200cm以上、山沿いで50~100cmの大雪となった。

その後一時天気は回復したが、19日から20日にかけて再び大雪となり、北部山沿いで50cm以上の降雪があり、山間部の積雪は300cmを越えた。しかし、下旬は概して天気良く、北部で時々5~6cm(1日)の降雪がある程度で、むしろ積雪は減る方であった。月末の30日から31日にかけて再び大雪となり、北部から北東山間部で60cm以上の降雪を見て、再び積雪は大きくなり、山沿い地方で80~100cm、山間部では300cmを越えて北陸なみ、あるいはそれ以上の大雪となった。

昭和38年(1963)
積雪日変化図(彦根)



このように本県の大雪は間けつ的に降り、概して北部に多く、伊香・東浅井・坂田郡を始め、各地で交通がまひし、電燈・電話線が切断され、山村30余部落が1ヵ月も音信不通の孤立状態となり、家屋の全壊・半壊、ひさしの折損など建物の被害も続出した。

また、寒さも厳しく、12月31日から2月半ばにわたって、気温が平年以上になったのは1月18日の1日だけで、あとは全部平年以下の寒さであった。彦根の1月の月平均気温は0.6℃で、1月としては気象台創立以来の最低記録となった。

警戒状況

種 類	発 表	解 除
	日 時 分	日 時 分
強風注意報	6日10時15分	
風雪 "	6 17 50	8 10 00
風雪 "	11 17 10	12 09 40
大雪 " (北部)	12 14 40	
大雪警報 (北部)	12 20 30	13 11 40
大雪注意報 (北部)	13 15 30	14 08 30
強風 "	15 11 30	
風雪 "	15 17 40	16 11 40
強風 "	19 04 30	
風雪 " (北部)	19 17 00	20 10 30
風雪 "	21 05 20	
風雪・異常乾燥注意報	21 10 30	
異常乾燥注意報	22 08 40	
強風・異常乾燥注意報	23 16 40	
異常乾燥注意報	25 10 00	

強風注意報 30日12時00分 日 時 分

風雪 〃 30 16 15 31 08 40

県における対策

この雪は近年まれにみる豪雪で、県ならびに関係市町村では全力をあげてその対策、り災者の救護活動に当たり、その実情を政府に訴え、豪雪非常災害対策地域としての指定・財政援助・り災者の資金融資措置などについて要望した。県でとりまとめた被害状況は次のとおりである。

長期間孤立した部落

余呉村 椿坂・中河内・下丹生・上丹生・菅並・小原・田戸・奥川並・鷺見・尾羽梨・針川
・半田。

木之本町 大見。

伊吹村 吉槻・甲賀・曲谷・甲津原。

豪雪被害状況（昭和38年2月14日現在）

被害総額			4,325,589千円
1 一般家屋等			401,814 〃
住家			
	全壊	3世帯	
	半壊	8 〃	
	一部破損	1,285 〃	
非住家			
	全壊	72棟	
	半壊	64 〃	
	一部破損	1,874 〃	
2 公共営造物等			21,400千円
小中学校	校舎被害	17校	8,500 〃
	工作物	〃	1,700 〃
医療機関	診療所	3所	400 〃
	隔離病舎	1 〃	400 〃
	病院	1 〃	1,000 〃
	水道	6 〃	1,800 〃
	防疫経費		400 〃
県有建物		42件	7,200 〃
3 農林業関係			2,849,249 〃
(1) 農作物			7743,249 〃
(2) 蚕糸特産			376,498 〃
(3) 林業			1,206,662 〃
(4) 農地			254,840 〃
(5) 土地改良			268,000 〃

4 商工業関係	291,345千円
(1) 中小企業関係	101,250 "
直接被害	1,250 "
間接被害	100,000 "
(2) 化学工業関係	5,000 "
(3) 鉱工業関係	145,000 "
(4) 繊維工業関係	35,450 "
(5) 電力関係	3,645 "
(6) 観光施設	1,000 "
5 土木関係	687,157 "
(1) 道路	503,157 "
(2) 河川	160,000 "
(3) 砂防	24,000 "
6 除雪関係費	74,624 "

1月の積雪と新積雪(最深) cm

観測所名	積雪	日	新積雪	日
彦根	44	16	30	12
木之本	101	31	52	30
竹生島	58	20	33	12.19
今津	68	16	30	13
大津	6	8.23	6	7.22
多羅尾	26	9.10	18	7
水口	6	8	6	7
八幡	11	14	11	13
政所	85	14	42	12
中之郷	165	31	60	30
愛知川	9	9	10	8
吉槻	160	20.31	56	30
市場	50	14.16	22	12.31
北小松	16	14	14	13
堅田	5	8	5	7
土山	20	8	20	7
治田	6	8	6	7
日野	20	8	20	7
中州	10	8	5	6.7
安曇川	27	14	20	12
油日	12	8	11	7
信楽	10	9	10	8
柏原	90	15		
中河内	360	30	70	10.29

昭和 39 年 (1964)

1月19～21日

19日から20日にかけて久し振りに県下一帯に雪が降り、平地で5～10cm、山地で30cm内外の積雪があり、各所で車が立往生し、山間部では小・中学校が臨時休校や授業打ち切りをした。

2月12～14日

12日夜から13日にかけて降りつづく雪で北部は今冬初の大雪になり、彦根市内で20cmになった。この雪と寒気のため国道は各所で凍結し、鈴鹿峠付近は13日早朝約1時間、約1,000台の車が立往生した。

その他バス路線の運休、通行不能の箇所も現われた。湖西地方は平地で30～40cm、山間部で100cmを越える積雪となり、学校の臨時休校が相ついだ。

2月24～25日

鈴鹿峠は24日來の吹雪で約5cmの積雪となり、25日未明からの気温低下で国道1号線は各所で凍結し、衝突、追突などの事故も発生し9時頃まで“かめの子運転”をした。

各地の積雪cm

	1 月		2 月		
木之本	10	21日	33	14日	0 25日
彦 根	6	"	20	13"	2 "
政 所	39	"	32	14"	5 "
八 幡	13	"	12	13"	1 "
今 津	18	"	40	13" 14"	— "
市 場	32	"	45	14"	11 "

昭和 40 年 (1965)

2月3～4日

2月1日は低気圧が日本海から北海道方面に進み、次第に冬型となり季節風が強まったので、県北部では全般に風雪が強くなった。この風雪は4日朝までつづき、北部山間地帯で150cm内外湖西山間地帯では50～100cmの積雪を見た。このため湖北・湖西方面の交通機関が混乱し、各地で臨時休校が出た。

2月24～26日

2月20日から21日にかけて低気圧が発達しながら日本付近を東へ進み、そのあと大陸の高気圧が張り出してきて日本付近は冬型気圧配置になった。このため本県では21日から北西の季節風が強まり、北部では24日から風雪が強まり26日にかけて山間地帯で100cm以上、山沿地方で50cm内外の積雪を見た。

3月5日

5日早朝から降り出した春雪で、本県山間部は鈴鹿峠で約7cm、平野部で約10cmの積雪となり、国道1号線は各所で凍結した。また国道8号線でもトラックの追突事故で約1,000台の車が立往生し、2時間にわたって交通まひを起こした。

各地の新積雪状況 (cm)

		2月		3月	
木之本	40	2日	36	25日	8
彦根	21	3日	27	24日	0
今津	35	3日	40	24日	6
八幡	0	2日	9	25日	3

12月16～18日

16日3時、大陸に1082mbの優勢な高気圧があり、北海道方面に発達した982mbの低気圧があって気圧配置は典型的な冬型になり、強い寒波が襲来した。

このため16日早朝から県下全域に雪が降り出し、風雪がやや強まった。夜に入って北部は風雪共に強く、17日朝彦根地方では30cm内外の積雪があり、最深は35cmを測った、この大雪は彦根では12月としては昭和20年12月19日(57cm)以来の大雪であった。

この大雪で名神高速道路をはじめ、各主要道路の交通がストップし、まひした。

12月24～26日

24日から再び冬型になり、寒波が襲来したので25日にかけて全般に風雪が強くなり、北部で20～40cmの積雪があった。

12月30～31日

28日から29日にかけて低気圧が日本近海を東進し、その後、大陸の優勢な高気圧が張り出して典型的な冬型になったので、北部一帯は30日夕刻より雪が降り出し、31日一ぱい降りつづき10～20cmの積雪となり、特に彦根の新積雪(31日)は32cmであった。このように大晦日に大雪があったのは近年珍しい現象であった。

12月各地の積雪cm

木之本	37	18日	29	26日	8	31日
中之郷	42	18"	40	26"	18	31"
吉槻	60	18"	26	26"	10	31"
柏原	91	17"	13	26"	25	31"
彦根	35	17"	12	25"	12	31"
八幡	2	17" 18"	—		7	31"
今津	46	17"	22	25"	18	31"

干 ば つ 編

本県の干ばつの概要

干ばつについては、古来いろいろの書物に記録されているが、それらを見ると、われわれの祖先がどんなに干害に悩み苦しんだかがうかがわれ、大正から昭和にかけての時代でさえ、激しい水争いが起こっているのである。

気象関係資料の整った明治26年から昭和40年までの73年間で、20日間以上にわたって降雨のなかった日照りの調を巻末の資料編に収めたが、これによると、明治42年の7月24日からの47日間が最高記録で、次いで大正13年の7月5日からの46日間、大正2年7月5日からの38日間、また最近では昭和26年7月18日からの32日間など18回となっている。

もちろん、干ばつとは、単に日照りだけが決定的な要素でなく、その前数箇月間の雨量・気温・蒸発・農作物の性質あるいは地質・灌漑^{かんがい}施設などの状況によって左右されるもので、近年ダムの建設その他灌漑水利設備の充実などにより、干ばつは次第に克服されつつあると言えよう。

しかし、琵琶湖を持つ本県は、日照りが長く続けば、いきおい湖水の水位が下がり、産業の発達・人口の増加などに伴って、水道用水・工業用水・電力用水など水の需要がますます高まった今日では、湖上及び周辺の諸産業に大きな被害をもたらすばかりでなく、京阪神の重要な水源地として影響するところも、実に大きいものがある。昭和37年秋から冬にかけての異常渇水時には、下流への放流にからむいろいろの問題が起こり、その対策が社会的にも政治的にも大きく取り上げられた。このように、干ばつについての概念は、時代とともに変わりつつあるのである。

本編には、数多い干ばつ記録のうち、明らかに本県に関する記述のあるものだけ、その内容を収録し、本県にも影響があったのではないかと思われる干ばつについては、「日本旱魃・霖雨史料」、本県各郡志等から摘録し、次の年表として掲げるにとどめた。

干 ば つ 年 表 (西暦701~1873)

邦 暦 年	西 暦 年	事 項	邦 暦 年	西 暦 年	事 項
大宝 元	701	畿内 干ばつ	延暦 7	788	畿内 大干
" 3	703	近江 干ばつ	" 9	790	畿内 大干
養老 元	717	畿内 不雨	弘仁 5	814	畿内並びに近江 干害
天平 4	732	畿内 大干	天長 9	832	畿内 干
" 5	733	近畿並びに四国 干損	寛平 3	891	京都並びに畿内 干ばつ
" 15	743	畿内 不雨	延喜 17	917	京都並びに畿内 干ばつ
天平宝字6	762	諸国 大干・京畿 飢きん	" 19	919	畿内 干

邦 曆 年	西 曆 年	事 項	邦 曆 年	西 曆 年	事 項
延長 5	927	畿内 干	慶長 10	1605	諸国 干ばつ
天慶 6	943	畿内 干	" 12	1607	近畿諸国 干ばつ
天曆 8	954	畿内 干	元和 3	1617	近畿 干
天徳 元	957	畿内 大干	" 7	1621	畿内 雨ごい
応和 3	963	京都並びに近国 干ばつ	寛永 3	1626	諸国 干ばつ
安和 2	969	畿内 干	" 19	1642	天下 大飢饉 ^{きん}
天禄 2	971	畿内 干	承応 3	1654	諸国 大干ばつ
永観 2	984	畿内 干	寛文 3	1663	諸国 干ばつ
永延 元	987	畿内 大干	" 8	1668	干ばつ
正暦 2	991	京都・諸国 干ばつ	" 10	1670	飢饉 ^{きん}
万寿 2	1025	諸国 大干	延宝 3	1675	飢饉 ^{きん}
長元 5	1032	京都並びに近国 干ばつ	" 8	1680	近畿・関東・奥羽諸国 干ばつ
永保 2	1082	五畿七道 干ばつ、飢饉 ^{きん}	天和 2	1682	飢饉 ^{きん}
治承 4	1180	干ばつ	貞享 元	1684	大干
元暦 元	1184	近畿諸国 大干	" 2	1685	"
仁治 元	1240	畿内 大干	" 4	1687	近江 干ばつ
正平 17	1362	京都並びに近国 干ばつ	正徳 5	1715	大干
明德 4	1393	近畿 干ばつ	享保 2	1717	大干ばつ
応永 28	1421	近畿諸国 大干	" 9	1724	近畿・四国・山陰・九洲 干ばつ
永享 2	1430	干	" 10	1725	諸国 干ばつ
" 5	1433	讃岐・近畿諸国 干ばつ	明和 3	1766	近畿 干ばつ
" 8	1436	近畿諸国 干ばつ	" 7	1770	諸国 干ばつ
長禄 3	1459	畿内 干	" 8	1771	畿内近国 干ばつ
寛正 2	1461	京都近国 干ばつ、飢饉 ^{きん}	天明 2	1782	飢饉 ^{きん}
文明 14	1482	干	" 5	1785	五畿内及び諸国 干ばつ
" 17	1485	畿内並びに讃岐 干ばつ	寛政 2	1790	近畿 干ばつ
永正 11	1514	近畿 干ばつ	" 6	1794	干ばつ
天文 4	1535	諸国 大干	享和 3	1803	諸国 干
弘治 3	1557	近畿諸国 干ばつ、飢饉 ^{きん}	天保 3	1832	諸国 大干
永禄 元	1558	近畿諸国 干	天保4~7	1833~36	飢饉 ^{きん}
" 3	1560	近畿諸国 干	嘉永 6	1853	大干ばつ
慶長 9	1604	諸国 干ばつ	明治 6	1873	干ばつ

大 宝 3 年 (7 0 3)

7 月

7 月 17 日 ^{ひのえうま} 丙午、近江国の山火おのずから焚く。使をつかわして雨を名山大川に祈る。〔続日本紀〕

天平宝字 6 年 (762)

5 月

5 月 4 日 ^{みずのえうま}壬午、京師及び畿内・伊勢・近江・美濃・若狭・越前等の国飢う。使をつかわして之を賑給せしむ。〔続日本紀〕

弘仁 5 年 (814)

7 月

7 月 25 日 ^{かのえうま}庚午、畿内・近江・丹波等の国、この年干災頻発し、^{かびょう}稼苗多く損す。〔日本後記〕

正平 17 年 (1362)

6～11 月

今年の 6 月より同じく 11 月の始めまで干ばつして、五穀も実らず、草木も枯れしほみしかば、鳥はねぐらを失い、魚は泥にいきつくのみならず、人民共の飢死する事所々に数を知らず。此の時近江の湖も 3 丈 6 尺 ^ひ干たりけるに、様々の不思議あり。〔太平記〕

永享 2 年 (1430)

4～5 月

卯月 28 日 ^{うづき}雨少し降りて、又 5 月 13 日又少し降り、其の外はすべて夕立だにもせず。よって作毛難儀なり。たまたま植付くる若苗枯れしほみ、田の面白河原のごとし。〔栗太郡志 (大宝神社文書)〕

寛正 2 年 (1461)

1～7 月

災干により、餓死数千人。〔興福寺略年代記〕

去る冬以来、此の年夏まで疫餓死者巷に満つ。〔彦根市史稿〕

文明 14 年 (1482)

7 月

7 月 21 日 天王において雨ごい。〔栗太郡志 (大宝神社文書)〕

永禄 3 年 (1560)

3～6 月

白鬚大明神前 1 町汀に石の鳥居現わる。〔白鬚神社明細書〕

寛永 3 年 (1626)

4～8 月

夏 4 月より秋 8 月まで、天下大干ばつにて、江洲大半渴し、或いは鱗魚水に渴して死し、又草木ことごとく枯れしおねて糸によられしなり。〔玉露叢〕

寛永 19 年 (1642)

天下 ^{ききん}大飢饉。〔愛知郡志 (森野記録)〕

承応 3 年 (1654)

6 月・7 月大干。7 月 9 日より 15 日まで、当所 (愛知川町) 若宮へ雨ごい、15 日踊りを致す。〔愛知郡志 (森野記録)〕

寛文3年(1663)

6・7月干す。〔愛知郡志(森野記録)〕

寛文8年(1668)

6・7月干。去る^{とら}寅年以來の大干、在々所々雨ごいこれあれども、当所は公事にて雨ごい掛けず。〔愛知郡志(森野記録)〕

寛文10年(1670)

米穀高し。去年の凶作による彦根における飢死250人。救助米2,800俵を下し、飢人^{にき}を賑わす。
〔彦根市史稿〕

延宝3年(1675)

天下飢饉^{きん}。〔愛知郡志(森野記録)〕

天和2年(1682)

春飢饉^{きん}。〔愛知郡志(森野記録)〕

貞享元年(1684)

6、7月大干。7月13日より7日内、当社に雨ごい。〔愛知郡志(森野記録)〕

貞享2年(1685)

6～7月

6月5日より干、所々雨ごいあり。7月5日雨降り、水出^いず。又7月大干。〔愛知郡志(森野記録)〕

貞享4年(1687)

6月、7月大干。所々雨ごいあり。7月25日より8月朔日^{ついなち}まで当社へ雨ごい。7日の内に両度雨ふる。〔愛知郡志(森野記録)〕

正徳5年(1715)

大干にて百姓苦しむ。膳所本多候親しく靈祭を修し、甘雨を得。〔懷郷坐談〕

享保2年(1717)

5～8月

大干ばつ。5月30日に雨ふり、6月朔日^{ついなち}大水出^いず。それより雨降らず(8月朔日^{ついなち}少風雨)、夕立一両度ばかり。所々の明神雨ごい。8月15日雨降る。〔愛知郡志(森野記録)〕

明和7年(1770)

6～7月

6月より大干ばつ。〔愛知郡志(平松山田記録)〕

6月11日より閏6月まで雨無し。7月24日に雨降る。百年に一度の大干。上田大明神に雨を祈る。〔蒲生郡志(杉森共有記録)〕

7月13日。雨ふらざること月余、炎干はなはだしく、草樹多く枯れ、汗池皆^{おち}渴^{かわ}く。(中略)琵琶湖の水減すること1丈、鹿跳の辺、奇石露出。これ未曾有の事なりという。〔東浅井郡志(続史愚抄)〕

天明2年(1782)

東浅井郡東草野村曲谷及び大郷村南浜飢ゆ。小室藩これを賑恤^{しんしゆつ}す。越えて3年・4年にわたり、

東野谷に飢ゆる者多し。小室藩引続きこれを賑給す。〔東浅井郡志（西村文書、小堀孝長日記）〕

寛政 6 年（1794）

5～7月

5月より7月まで雨無し。上田大明神及び武佐市神大明神に雨を祈る。〔蒲生郡志（杉森共有記録）〕

享和 3 年（1803）

是の歳大干。近江の湖水涸ること7尺。〔続皇年代略記〕

天保 3 年（1832）

6～7月

6月17日より干ばつ。7月29日まで43日の干。〔愛知郡志（平松山田記録）〕

天保 4 年～7 年（1833～36）

飢饉

天保4年の凶作に翌5年の米価高値となり、5・6両年も冷気のため凶作を続けたる後、同7年の大凶作となり、4年間連続の不作に全国飢ひょう（餓死者）其の数を知らず。飢饉に伴う栄養不足は、必ず伝染痢病を發し、罹病死亡の数頻發は免るべからざる所なり。山林に入りて新樹を摘みて食料とし、樹皮を削りて団子として食せし記録は処々に存す。藩はりん倉（米ぐら）を開きて領内貧民を救うも、火災・水害等による一時的の救済と異なり、連続的救済を要す。されば民間有志の寄附義捐に待つもの多し。当時彦根町民本町佐藤原右衛門他41人の義者あり、それぞれ金・米を出して其の救恤に当てたり。〔彦根市史稿〕

嘉永 6 年（1853）

4～9月

5月19日より7月7日迄雨無く、百年余り無き大干。〔愛知郡志（平尾記録）〕

4月下旬より大干ばつ。平居村より東円堂村、其の外五個ノ庄近村田植六分休みになる。5月18日大雨、その前5日雨降り続き、川々大洪水、急に田植成就。その後干ばつ甚しく、諸国水論記するに限りなし。月ノ木村・土田村此の近村7ヶ村と高宮宿と水論してあたかも合戦のごとく、ついに領主に強訴せんと善利新町のほとり川中にたむろし、徒党雲のごとくとかや。即日夕陽のころ静まる。

此のころ（8月）干ばつ止まず、地中4尺5寸かわく。北の庄村の人地中を掘り、ためし見る人ありて知る。愛知川のほとり「不飲の淵」も、水涸れて流れず、淵の水4、5寸になる。

所々の松檜枯る。愛知川の両岸の松七分通り枯る。

9月上旬に至り、おりおり雨降れども、微雨にして水涸れ止まず、飲料水に難渋の家多し。此の度井戸を深く3、4尺掘らぬ家なし。（中略） 田地乾いて稲草みな枯る。あたかも野山の冬枯れの如し。（中略） 高宮より法養寺まで稲の穂見ず。余が在所より北ノ庄まで四分通り穂見えず。北ノ庄より西は豊作。

8、9月湖水涸れて、福堂村新田より伊崎まで歩行にて参詣賑わしく、此のころ観音寺開帳停止によってなり。〔愛知郡志（山本記録）〕

5月24日より日照り、百日間雨無し。〔愛知郡志（福山記録）〕

明治・大正年間の干ばつ

明治以降干害のはなはだしかったのは、明治9年6月、16年8月、19年8月、27年7～8月、39年6月、大正2年8月、11年7～8月、13年8月とする。（県史）

明治6年（1873）

7～9月

7月18日少雨後9月11日夜まで雨なし。干害多く、作米上中下に分け、斗高に8掛、7掛、格別は半掛。〔愛知郡志（平尾記録）〕

明治26年（1893）

6～8月

6月以降雨無きこと60余日、田養水^{こかつ}涸^こし、田面亀裂、稲苗枯死す。1、2回のにわか雨ありといえども、わずかに一旦^{うるお}を湿すに過ぎず。8月中旬以降雨あり、蘇生せしものあれども、ついに^{かきふく}恢復せざる稲田1,434町余歩に至る。古老は嘉永6年及び明治16年の被害に譲らずという。〔蒲生郡志〕

明治42年（1909）

7～8月

7月の上半月は梅雨の状態を呈したが、雨量は平年に比して非常に少なく、下半月に入ると、全く梅雨の状態を脱し、気温急昇し、晴天打続き、ほとんど降水をみずして翌月にわたった。8月は、雲量及び湿度は未曾有の寡少で、日照時は非常に多く、雨量は平年の約4分の1に達せず、ために干ばつの害を被った所が少なくなかった。

彦根における降水量は、7月61mm、8月36mmであった。

大正2年（1913）

6～8月

6月以降雨量少なく、6月は平年に比べて4割の少量、7月は平年の5分の1に過ぎず、8月に入っても依然として降雨を見ず、実に7月4日より8月18日に至る45日間はほとんど降雨を見ないで経過した。またこの年は雨量が少ないばかりでなく、雲量も少なく、風力強く、日照時が非常に多かったため、干害がはなはだしく、作物の枯死したもの416町歩、田面に亀裂を生じたものは12,304町歩に達した。

大正11年（1922）

9月

3月来の降雨不足、特に5月から6月にかけてと、8月から9月にわたる期間と再度の干ばつにより、琵琶湖の水位が著しく低下した。

彦根における3月から9月に至る7箇月の降水量は、別表に示すとおり、平年に比して5割4分に過ぎなかった。

伊香郡志の記録によれば、この年は、田植当時すでに干天が打続き、5月8日以後6月25日ま

でに雨量は僅かに39mmで、適期より7日以上も遅延したものが郡内で29町4反に達した。その後ようやく天候は適順となったが、再び8月1日から9月23日にわたって大干し、各町村山間の谷水をもって灌漑するものは生育不良で、はなはだしきは稲苗の枯凋したものがあつた。収穫皆無のもの120反、5割減収208反、3割減収322反。

大正12年(1923)

7~8月

7月26日から8月24日までの30日間ほとんど降雨なく、25日に至り彦根で21mmの雨量を測つたが、その後再び照り続き、31日からようやく順調な降雨状態を現わし、9月に入った。彦根での8月中の降水量は46mmに止まり、最近珍しい少雨となった。県下各地とも彦根地方と同様雨量少なく、前記の30日間に20mm以上を測つたのは大津・土山・八幡・政所・吉槻・坊の各地で、いずれも驟雨性の降雨であつた。

各河川の水量は著しく減少し、琵琶湖の水位もまた低下して、最低基点下6cm余(鳥居川標水標)に達した。

この年は、4月以降かなりの降水があり、ことに梅雨期間中に相当な降雨を見た結果、この干ばつに会つた割合には、水源の涸渴を訴えることが少なかつた。しかし、干ばつに弱い東浅井郡下草野・湯田・七尾の各村、犬上郡東甲良・西甲良、栗太郡大宝・物部の各村において多少の干害をうけた。

(別表) 月別降水量と平年値 mm (彦根)

区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
平年	118.4	105.2	120.7	126.6	144.7	205.1	187.2	128.0	209.8
明治42年	178.8	107.8	141.5	116.8	100.9	355.6	61.2	36.2	339.1
大正2年	115.9	83.5	57.8	125.8	260.0	127.8	43.9	135.8	89.3
" 11年	226.6	168.3	104.4	96.0	68.1	74.4	151.3	61.0	45.2
" 12年	129.4	101.2	122.6	146.9	261.6	388.5	300.9	46.1	243.3
" 13年	62.8	93.2	57.5	118.0	198.9	80.6	49.1	82.4	121.0

平年値=明34年(1901)~昭5年(1930)の30年平均

琵琶湖月別最低水位 cm (鳥居川18時)

区分	4月	5月	6月	7月	8月	9月
明治42年	35(6日)	15(25日)	14(4日)	21(31日)	-17(29日)	-18(16日)
大正2年	56(20日)	64(26日)	49(30日)	5(31日)	-16(30日)	-24(30日)
" 11年	25(24日)	4(28日)	-11(29日)	-13(2日)	-28(30日)	-55(30日)
" 12年	38(12日)	43(20日)	35(8日)	56(31日)	-5(30日)	-2(4日)
" 13年	12(1日)	30(2日)	9(30日)	-24(28日)	-56(31日)	-71(29日)

大正13年(1924)

1~8月

1月以降概して降水量少なく、降雪期間における積雪が少なかった関係も加わり、各河川上流地方の水源があまり豊富でなく、梅雨期は「から梅雨」となって、各地で田養水はもちろん、地方によっては飲料水さえ事欠く水涸れの状態となった。

「から梅雨」にわざわざされて、稲の値付ができない面積が県下各地に相当多かったが、7月2日より3日にわたり一時に降雨（彦根37mm）があり、大部分の稲田は植付を終了した。しかし、翌4日より再び干天打続き、8月19日までの47日間にわずか13mm（彦根）の降雨を見ただけであった。

このから梅雨は、彦根測候所創設以来第2位に属するものであり、その被害程度より見るときは、恐らく未曾有のものと思われる。

昭和2年（1927）

7月

梅雨期の前半約20日間は、概して晴燥な天候打続き、あたかも「から梅雨」のような状態を呈し、田養水の潤沢でない地方は、すでに用水不足を告げていた。7月に入ってから梅雨の状態を現わし、連日陰湿な天候が続き、相当の降雨を見たが、なお県下の一部地方では植付未了箇所があった。7月中旬ごろから、天候はたちまち盛夏の状態となり、気温はにわか昇って、最高気温は30度を突破し、一時的驟雨はあったが雨量は少なく、ついに干ばつとなった。

例年干害を受ける地方は用水ほとんど欠乏し、蒲生郡の東部においては用水争いが起こり、栗太・神崎・愛知・東浅井・高島・甲賀の各郡でかなりの干害があった。

干 害 状 況 （8月25日）			
		（勸業課調）	
郡 市 名	収穫見込なき反別	郡 市 名	収穫見込なき反別
大 津	20反	愛 知	1,473反
滋 賀	972 "	犬 上	2,359 "
栗 太	1,416 "	坂 田	378 "
野 洲	434 "	東浅井	不 明
甲 賀	875 "	伊 香	46 "
蒲 生	6,538 "	高 島	678 "
神 崎	170 "		

昭和4年（1929）

7～8月

梅雨期の前半は晴天が続いたが、7月に入って急に梅雨の状態を現わし、陰湿な天候が続いた。7月11日に至って天候は回復、盛夏の状態となり、気温は急に昇り、連日30℃を突破し、ときどき驟雨性降雨はあったが、その量少なく、干天が続いた。

この干ばつは、7月11日から8月14日にわたる35日間で、この間彦根で降水総量11mm、降水日数は6日であった。

農務課でまとめた被害は次のとおりである。

郡 別	用水不足	田面亀裂
栗 太 郡	26,710反	5,201反

野 洲 郡	1,025反	20反
甲 賀 郡	3,825 "	527 "
蒲 生 郡	4,870 "	1,670 "
犬 上 郡		1,435 "
坂 田 郡		2,355 "
東 浅 井 郡		1,200 "
伊 香 郡		167 "
高 島 郡	320 "	5 "
計	36,750 "	12,580 "

昭和 8 年 (1933)

6~7月

冬期における山岳地方の降水量は平年より少なかった。また、5月から北太平洋高気圧の中心が平年より南下し、中心勢力がやや優勢で、本県付近に雨をもたらす低気圧の襲来を阻止した。このため本県地方は未曾有のから梅雨に会い、6月23日から7月25日に至る33日間は、ほとんど連日干天打続き、この間彦根では降水日数10日、降水総量14mmをみたに過ぎなかった。

この干ばつは、明治42年・大正13年に次ぐもので、その害の著しい地方は、湖東・湖北及び湖西の各地で、湖南地方は比較的少なかった。

8月15日現在で、この被害額は614,000余円と見込まれている。

被害状況 農務課調 (7月20日現在)

植付未了地	750反	田面亀裂	40,043反
枯死したもの	149 "	用水不足	70,819 "
萎凋したもの	3,955 "	計	115,716 "

昭和 10 年 (1935)

4~6月

4月以降の降雨状況は、4月上旬・中旬及び5月中旬は比較的潤沢であったが、4月下旬、5月上旬・下旬及び6月上・中旬の各期間は、いずれも甚だしい降水不足を呈した。

旬別降水量と平年値 mm (彦根)

区 分	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
平 年	43.0	38.3	49.4	50.2	41.5	41.8	45.5	68.0	88.4	90.3	57.8	46.3	43.7	34.6	45.0	79.7	66.2	90.7
昭和 2 "	22.9	39.3	38.4	73.6	40.4	38.6	34.0	77.2	2.8	94.0	5.6	57.4	123.5	11.1	14.3	62.4	61.4	102.0
" 4 "	46.3	19.3	31.8	68.6	5.8	54.9	22.9	10.3	1.4	120.3	3.1	5.0	0.0	86.7	36.4	102.5	50.2	156.4
" 8 "	40.3	24.2	71.9	7.5	91.3	13.0	19.7	18.1	26.8	3.6	5.2	37.6	36.5	48.8	51.0	8.9	59.4	51.4
" 10 "	45.3	44.7	5.7	22.1	54.0	3.5	36.7	17.7	224.7	86.6	40.6	2.4	46.4	59.9	93.0	109.0	98.3	101.7
" 14 "	21.6	14.1	74.4	11.8	41.1	2.8	25.7	16.3	92.7	18.5	28.3	6.3	24.3	4.0	62.6	81.1	22.2	8.8

平年値=明29(1896)~昭10(1935) 40年平均

県下で最も雨不足を呈したのは、高島郡西部・滋賀郡西部湖岸、蒲生・神崎の湖畔部、東浅井

郡北部、伊香郡等で、高島郡中部、滋賀郡北西部、野洲・甲賀・蒲生・神崎及び愛知郡の大部、犬上郡北部、東浅井郡の南東部等がこれに次ぎ、おおむね湖畔部に雨不足の傾向が顕著で、各地で水稻の植付不能並びに亀裂田等を生じ、水論を引き起こし、干害は深刻であった。

6月15日現在県農務課でまとめた被害状況は、干害面積148,385反で、うち亀裂田16,628反、植付未了田25,690反となっている。

昭和14年(1939)

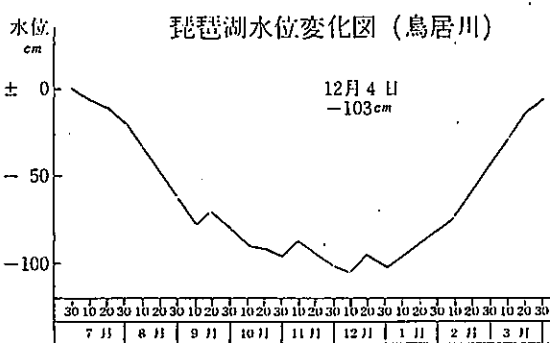
5～9月

5月以来、まれに見る少雨状態で経過し、梅雨期における雨量も平年に比較して約5割に過ぎず、その後も干天続きで、ついに県下を通じ未曾有の干ばつとなった。5月以降8月に至る各旬間の雨量は別表のとおりで、6月下旬・8月下旬のほかはいずれも平年より少なく、中でも5月下旬、6月中旬、7月上・下旬及び8月中旬は、著しく雨量少なく、干ばつは3回に及んだ。

第1期は、5月13日より6月7日に至る26日間で、この期間中の雨量はわずかに6mm(彦根・以下同)に過ぎず、第2期は7月12日より8月5日に至る25日間で、この間の雨量は18mm、第3期は8月7日より9月9日に至る34日間で、雨量は7mmに過ぎない状態であった。

このように3期にわたる干ばつに会い、県下の干害は深刻を極め、8月末現在の農務課の調査によれば、水稻作付反別63,786町7反の中、植付未了面積は53町1反あり、植付後枯死したものの553町5反に達し、植付面積に対する被害面積の割合は2割5分を占めるに至った。その被害の最もはなはだしかったのは、犬上郡・神崎郡・愛知郡・蒲生郡・彦根市等で、湖北・湖南地方はやや少なかった。稲作のほか夏作蔬菜・果樹・桑園等の被害も少なからず、ことに桑園は枯凋して著しく発育を阻害され、秋蚕掃立てに支障を来した地方もあり、その他水産業の損害、あるいは湖東地方の飲料水の涸渇等干ばつが各方面に及ぼした影響は甚大なものがあった。

琵琶湖の水位は、連日の干天により日増しに低下し、9月9日午後6時に-84cmとなった。この記録は明治8年鳥居川量水標開始以来の最低水位であり大正13年の大干ばつ時の-71cmより、更に13cmの低下である。



昭和14年

昭和22年(1947)

8月

7月は、ときどき雨が降ったが、月降水量は平年よりかなり少なく、8月に入っても、ときどき夕立があった程度で、雨量は少なく、各地で干ばつの被害が出た。

降水量平年値比較mm (彦根)

	7月	8月	
本年	80.8	65.7	
平年	176.9	108.8	平年=大10(1921)~昭25(1950)の30年平均

新聞では、その被害状況を次のように報じている。

犬上地方 昼夜の別なく水入れに懸命で、河瀬・豊郷・高宮の一部では田面に亀裂が生じた。

蒲生神崎地方 枯死寸前の水田1,000反、田面亀裂約100,000反に及んだ。

湖北地方 干害の危機にさらされ、姉川の「いずも井せき」は13年振りに切り落とされた。

琵琶湖は、水位低下で汽船が入港できない港がでてきた。

昭和 26 年 (1951)

7～9月

7月18日以後雨が少なく、月末までに彦根でわずかに0.5mmの雨量があっただけで、湖南や湖西方面では全然雨が降らなかった地方もあった。8月に入っても、ときどき雷雨はあったが、干天がつづき、月合計雨量は彦根で37mm、最少は湖南の治田で14mm、最多は政所の149mmであった。9月も中旬始めごろまで雨が少なく、長期にわたって干ばつがつづいた。

昭和 30 年 (1955)

8月

7月27日以来8月19日まで、県下各地は、ときどき夕立があった程度で、連日炎天が続き、水不足は深刻となった。

8月16日県の調査による水田の状態は、枯死状態のもの458反、枯死寸前のもの29,540反、用水不足でひび割れのもの51,922反となっている。

昭和 33 年 (1958)

5～7月

5月中旬の約8日間と6月下旬の1週間の降雨のみで、一時的には雨がかったが、この間延30日間は干天が続き、植付期の各地で水不足をきたし、田植ができなところがあった。しかし、6月28日から7月4日までの7日間に100mm程度の雨がかったので、やっと水不足も解消し、田植が終了した。

干害応急対策事業実施状況 (耕地課調)

年 別	団地数	対象面積 ha	事業費 千円
昭和 33 年	109	3,388	11,519
“ 35 年	66	1,328	16,830
“ 39 年	837	5,366	129,788
国庫補助事業	664	4,693	121,680
県費事業	173	673	8,108

昭和 35 年 (1960)

7～8月

7月中旬から、優勢な大平洋高気圧におおわれる日が多かったので、暑い晴天が続き、ときどき雷雨はあったが、全般に雨量は少なく、干ばつ気味の天気が続いた。

このため甲賀地方の水田が干し上がり、亀裂が生じて水稻の一部が枯死寸前の状態になった。

昭和 37 年 (1962)

9～12月

9月の台風期に始まって12月に至る期間の降水量は、平年に比べて非常に少なく、特に9月には、東部の鈴鹿山系では平年の10%にも満たぬ少雨で、土山・政所では観測所開設以来の記録を

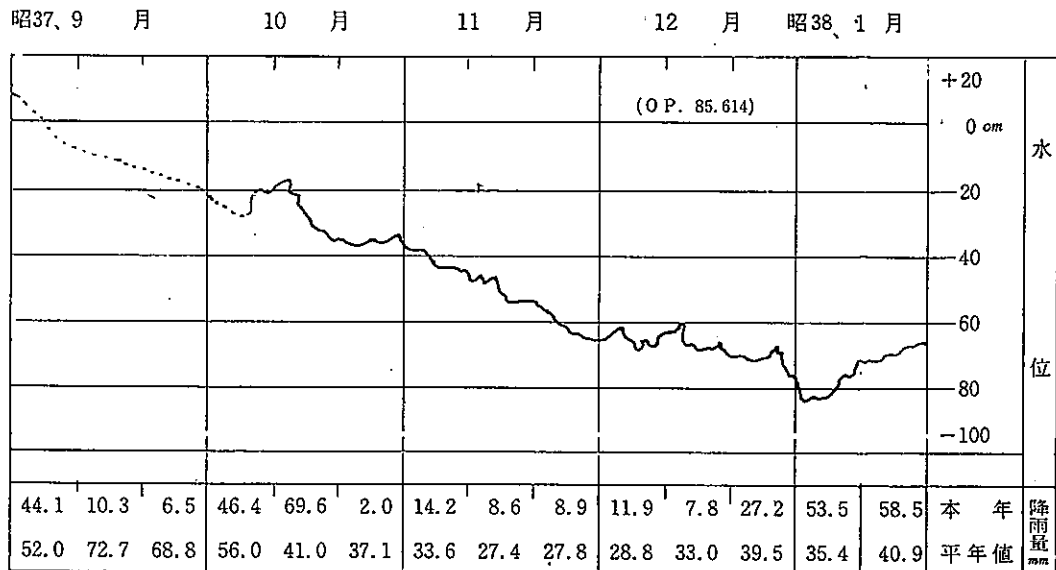
作り、また11月も湖北地方では平年の30%以下という少ない雨量であった。

夏からの気象の経過を見ると、7月・8月は比較的台風が多く、8月26日に台風14号が本県を通り、鈴鹿山脈で200mm以上、平野部で70mmくらいの雨が降った。しかし、その後西日本に上陸した台風も、秋の長雨もなく、9月24日には大陸の高気圧が張り出してきて残暑型から一躍秋になった。このため本県の最多雨地域である東部鈴鹿山系で平年の10%以下、西部山地で40%内外の少雨となり、異常渇水の原因となった。10月に入って、大分平常の状態にもどったが、それでも平年に比べると少なく、更に11月にはまた好天が続く、12月も同様で、9～12月の総雨量は南部の一部を除く全県で、平年の50%、あるいはそれ以下となって年を越したのである。

この9月からの雨不足で、琵琶湖の水位は下る一方で、11月下旬には-60cm（鳥居川・以下同）を割って最悪の状態になり、25日には南郷洗堰^{あらいぜき}を全閉、冬期計画放流も取り止め、京都疏水^{そすい}、宇治発電への流量も次第に制限された。しかし、水位はその後も下り続けて、1月2日から4日にかけては-82cmを示した。天災的異常渇水で、12月中に-70cmを割ったのは昭和14年以来23年振りのことである。

この低水位のため、湖上並びに周辺の産業に少なからぬ損害をもたらした、また下流への放流量にからむいろいろの問題など、社会的、政治的にも大きくクローズアップされた。

琵琶湖水位（鳥居川）と降雨量（彦根）



平年=昭6(1931)~昭35(1960)30年平均

昭和39年（1964）

5～8月

4月・5月は、北太平洋高気圧が北偏して発達し、日本はこの高気圧の圏内にあつて暖気団におおわれた。そして日本付近では雨をもたらす低気圧は発生せず、全国的に雨が少なく、特に中部日本から西日本にかけてこの傾向が強かった。

このため本県では、4月から5月にかけて高温が続く、雨が少なく、5月1日に20～30mm程度、10日に20～50mm降ったほかは、まとまった雨は降らず、この状態は6月中旬まで続き、いわゆる「5月ひでり」の天候が顕著に現われた。

このため各地で灌漑用水が涸れ、6月10日現在で県下に3,000haの水田が植付不能のまゝで、

あり、また、琵琶湖の水位も大きく下り、この季節としては珍しい低水位記録となった。

昭和39年干害応急対策地域別実施状況 (耕地課調)

地 域 別	団地数	対象面積 ^{ha}	事業費 ^{千円}
草津県事務所管内	95	579.1	19,616
水口 "	210	859.4	23,733
八日市 "	267	2,739.4	50,437
彦根 "	164	458.9	20,296
長浜 "	65	685.7	12,491
今津 "	36	43.2	3,215
計	837	5,365.7	129,788

昭和40年 (1965)

8月

7月下旬の本格的な梅雨明け後、日本は連日太平洋高気圧におおわれて、夏型の干天が続き、全般に雨を降らす低気圧や前線が一度も現われず、また雷雨も少なかった。

これがため、所どころでわか雨は降ったが、その量は極めて少なく、彦根では8月中の降水量は1.9mmで、8月の月降水量としては彦根地方气象台創設以来最も少ない記録であった。

8月旬別降水量と平年値^{mm} (彦根)

区 分	上 旬	中 旬	下 旬	月 計
本 年	0	1.5	0.4	1.9
平 年	40.5	42.2	48.4	134.0

平年=自昭6(1931)~至昭35(1960)30年平均

このため県下の農作物の干害もかなり現われた。

農作物被害		(農林企画室調)	
区 分	面 積 ^{ha}	数 量 ^t	金 額 ^{千円}
水 稻	21,390	1,876	204,806
枯 死	10	40	4,312
枯死寸前	1,550	1,836	200,494
用水不足	19,830	—	—
野 菜	栽培面積 1,446	929	12,309
果 樹	" 744	355	20,500
桑	488	蘭換算 39	25,464
飼料作物	" 400	5,500	12,950
計			276,029